

島根県立石見美術館

研究紀要

第2号

2008

島根県立石見美術館
研究紀要 第2号

発行日－平成20年3月31日

編集発行－島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷－株式会社タイピック



(図12)
レディ・ジャネット・ヒルの肖像
1915年 75×62cm
ロイ・ヒル氏蔵



(図13)
マーガレット・ヒルの肖像
個人蔵



(図2)
美人読詩
1906年 99.5×88.3cm
島根県立美術館蔵

目次

資料紹介 島根県立石見美術館所蔵	………	川西 由里	1
大下藤次郎日記(第2回)	………		
石橋和訓のイギリス時代	………	真住 貴子	19

〈資料紹介〉

島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記 (第2回)

川 西 由 里

明治二十八年の事を記す

序

明治二十八年 ア、明治二十八年余は如何にして此年を迎へ亦此年を送りしぞ余は無為に此年を迎へたり而して有望且満足に此年を送りたり何をか無為といひ何をか有望といふ蓋し此年の前半は余が家政整はず身は専ら目的に向ふ能はず紛々たる家累俗務に役せられて心徒らにあせり前途漠として実に夢の如く加ふるに前年に於ける余が罪は纏綿身にまつばり日夜良心の詰責を受け殆ど一身の處置にさへ迷惑するに到れり而して其後半は大に革新に進み家政の整理も日に緒に就き一身の罪も朋友の助力によりて事局を結び余は他に心を置くの要なくして其目的に専念する事を得たり啻に目的に進む事を得しのみならず先輩朋友の奨助によつて余が技術は頗る有望の兆を呈せり余は重ねて曰ふ明治二十八年は唯何となく迎へたり而して明治二十八年は大に有望なる意気を以て送りたり今や年々の例に倣ひ爰に年内事件の要を記さんとす

明治二十九年一月 大下藤次郎記

明治二十八年之記

○吾家と余れ

明治二十八年の新春を迎へしは前年新に築きたる駒込迫分町の家に於てせり屠蘇をくみ餅を祝ふもの母上と余と只一人の下婢とのみ淋しといへば淋しされど何の不满不平なく目出度賀正の欣びを享けしは豈幸福ならずとせんや

余は猶真砂町に土地と家屋と営業とを有す而して是等の管理は前年より義兄安太郎氏に托し余は時に臨みて監督経営せしなり

真砂町の邸は土地及家屋の収入並びに軍馬宿泊、旅人下宿の営業にて月々三四百円の収支あり土地家屋に於て年額凡百円の租税を納め所得税は年額金六円前後を納めたり

清国との戦争によつて営業上に幾分の餘響を受け此年二月頃は第四師団輸送の馬匹の為め邸内及邸外に厩舎四百を連ね非常の盛況をいたせり余は商業上に於て才なく弁なく亦資本に乏しと雖も其確實なると規則正しきとは大に当路者の信用を博し少々ならざる利益を得たり

余の畢生の目的は絵画にあり屑々たる営業盛衰常なく貸地貸家徒らに料金の停滞するのみにて腐朽破損絶へず何れも收支相償ふに到らず加之多額の負債あり年々巨額の利子と手数料を支払ふは余に於て耐え得る処にあらざ依て真砂町に於ける土地家屋を売却し営業を廢

し負債を償却し残余の金を以て数年の学資にあて大に目的に向て猛進せんとは是昨年春頃に於ける余の決心にて爾来親戚とも議を定めて此方針に嚮ひ其時機を待てり

十月四日木下静太郎氏より邸地週旋の談あり同月十五日議熟し子爵森川恒ノ代人兼買主氏家廣精に土地家屋悉皆金壹万壹千參百五拾円を以て多田源兵衛、木下静太郎、浅見某、松本市太郎立会にて売買の契約を結び同月二十一日取引を完了せり爰に於て土地家屋を引渡し従来の營業は根本撰次郎並びに長岡源次郎に譲り爰に家政の整頓を致せり

爾来追分町にあり平穩無事の生活を営む年々の最終日は出納の繁務に徹夜するの例なりしが本年はかゝる煩もなく掛取りの声もきかずして安らかに送る事を得たり

○余は如何にして日々を過せしか

明治二十八年の毎日は如何にして送りしぞ一月の頃は七時に起き十時に眠り日課としては重に真砂町に出張し閑を得て画面に向ふ事と朋友を訪ふ事なり寒氣強ければ画室には暖炉を焚けり徒然なる夜は母上の為めに小説を読み過せり二月、三月粗ぼ同様なり四月は營業幾分か閑なれば重に家に在て画筆を執れり此月より暖爐を廃しぬ五月朝起床の時間を三十分早くす此月初旬より蚊帳を用ふ六月起床の時間を五時半とす七月も同じ八月より十月まで起床を六時就床十一時なり此月末迄蚊帳を用ゆ十一月起床六時半とし此月より家累なきたため折々写景にゆく十二月初七日起床七時月初より暖爐を焚く

○余の健康

明治二十八年余は二十六歳となれり余は瘦肉長身決して健康體にあらず故をもて日常の摂生は尤も意を用ゆる処なり幸にして此年は大患に罹らず只氣候及び精神の変に依て発熱的病を得る事あり口中の腫れ(三月一日より三日間程)頭痛(四月三日より三日程)口中の腫れ(五月二日より四日迄同十四日より三日間ほど)口中腫れ(六月二十三日二十四日)感冒の氣味(十一月十一日より十七日頃迄)

九月一日に於ける余が体重は附着品の見積量を除き十五貫目身長は五尺六寸八分あり

五月二十四日より牛乳一合を用ひ同二十六日より二合を用ひ十月迄継続せり本年は悪疫流行の年なるを以て余は尤も食物の注意に怠らざりき魚肉を避けて牛肉及鶏卵を以て常食となしぬ

余は冷水摩擦の健康上益あるをき、此年夏期より実行せり余が執る処の方は毎朝下婢をして手拭を絞らしめ床を離るゝと同時に其手拭を以て前身を強く磨し而して后衣を着くるにあり此法は嚴寒の頃少しく困難なれども身体保護の上に尤も有益なる事を感じ

灸点の利益もかねて耳にする処なしが少しく疑ふ処あると其熱痛を懼れて試むるの勇氣あらざりしが身の閑散になると共に旅行等の事繁く脚部を壮健にするの急務なるを覚ゆるものから所謂三里なる灸を九月より試みたり然るに兼て思ひし程の苦痛もあらで氣の故にや脚も軽やかに思はるれば是より毎月旧曆一日より八日間用ゆる事となしぬ

○余の思想

明治二十八年は余に如何なる思想を起さしめしぞ余が日記は実に左の答をなせり

余は此平穩無事にして且幸福なる新春を迎へしを祝す而して此賜は実に地下に在ます父君の餘光と深く感謝する処なり(一月一日)

余は今日親戚と語りて頗る愉快を覚へたり一族相睦まじきは其一家に於て大なる美事なりと思へり(一月四日)

心に感ずる事あり何ぞや吾が前途なり然れ共吾は吾前途の危険を慮して煩悶すべきものならんや吾は思ふ最終の窮厄を覚悟して一身を処するは尤も確固たる安心の秘訣なりと(一月五日)

人は只最後の目的に向て進めば可なり苦痛あらん悲境あらん然れ共如何なる終極の苦痛の中にも尚且幾分の快樂は含むものなるべし(二月五日)

苦痛には必ず応分の樂を伴ひ快樂には必ず幾分の苦痛を伴ふ吾に高尚なる快樂を与へよさすれば高尚なる苦痛を甘んじ且喜んで受けん(二月六日)

何事も成就する迄せよ吾は此言に感ずる事深し(二月十三日)

余の財産整理の上相当の餘裕を得ば余は二三年の外国に学ばんと思ふ(二月二十七日)

亡き父上三週忌墓前に対して吾は心中言ふべからざる苦痛を覚ゆ古人言へり大効は細瑾を顧みずと吾は今墓前に誓ふ吾は必ず吾が目的を達して此心の罪を謝するの償とせん(三月三十日)

財産何かあらん是浮雲のみ只勉強して業を研き力食の覚悟是第一徒に憂悶を事とするは男子の道にあらず(四月三日)

音楽は他の美術より人に感度を与ふる事早きか(四月二十七日)

憂慮とは何物ぞや爰に憂慮すべき一の出来事ありと仮定せよ吾は此際に処して一段高所にありて觀察し且処分すれば足れり徒らに憂慮そのものに使役せられて煩悶するは吾の取らざる処なり(五月二十日)

絵画ア、絵画は吾が終局の目的吾が生命(五月二十一日)

品格は平素の行為より出づ(五月二十八日)

雅量なるもの人間交際上尤も必要なるものなるべし吾は吾が親戚の一人にこの美德の缺乏せるものあるを嘆ず(六月四日)

專念、是目的に進むの方法乎(六月二十五日)

人の感情は微細のことによつて損する事あり(七月二十日)

或る場合に於て親友は父母兄弟よりも頼もし(七月三十日)

憤発、憤発吾は大に憤発せざるべからず(九月五日)

夜来の暴風雨吾は床中にあり然れ共街上巡查あらん車夫あらん其他の人々あらん此寒天の暴風雨彼等は其職務に其營業に渾身雨に濡れつゝあるにあらずや嗚呼吾は何の幸か床上に温かに眠る吾は吾が幸福を樂むと同時に吾に応分の責任ある事を忘るるべからず然り応分の責任ある事を忘るるべからず(十二月二十七日)

吾目的は絵画にあり而して吾は絵画の中何れを専修せんか風景か人物は吾は人物に於て風景に劣れりとなすされど技術の巧拙は除外として何れが尤も美を含むといはば風景は自然の美人物画は人為の美を含み優劣あるべくも覚へず吾元来自然美を愛すこの故に吾は風景の美を撰ぶ乍併人物の美決して抛棄すべきものにあらず依て吾は人物画の内尤も自然に近く且高尚なる宗教的歴史画を描かんと思ふ何

そや神代の歴史なり此事元より大望決して吾が鈍筆の能事にあらねば此種の画は只一生一図を以て満足し常に大に風景画に従事せんと欲す（十二月三十日）

除夜、世間幾多の家々は債主の督促に身を縮め迎春の準備に心を痛め或は質店に或は高利貸に奔走し或は泣きあるは怒り此夜を心労と悲痛とを以て送るもの少々ならざるべし然り然るに余は何の幸ひか一点の苦痛一片の不平なく穏やかに且愉快に明治二十八年を送る吾は窃に身の祝福を喜ぶと共に亡き父上の霊に向て大に感謝せざるべからず（十二月三十一日）

○学業

明治二十八年の書き初めは実に二月二日なり油絵の風景小画をかく二月七日野戦場の小画をかく二月十日少女の肖像かく二月十一日油絵風景かく二月十八日松本氏肖像かきはじむ三月十四日泣き父君の油絵肖像かき始む三月二十八日亡妹まさ子肖像かき始む三月二十九日父君肖像出来四月一日有坂氏及服部氏肖像油絵かき始む四月十日油絵小風景かく四月十二日松本肖像出来（油絵）引渡す四月七日水彩画具もちて地方へ写生にゆきしも出来ず四月十七日油絵小風景かく五月一日婦人乗馬の図を写し始む（油絵）五月八日油絵小絵の寫の図をかく五月十一日川舟依頼の墨絵肖像かき始む五月十五日墨絵肖像出来渡す五月三十日少年の人物写生を始む一日三時間六月五日少年人物写生出来六月八日根本氏依頼の野馬の油絵にかゝる六月十日老人の写生にかゝる六月十六日写生人物の油絵出来この頃淡彩の小風景画をかく九月三日早川へ送らなため油絵小風景かく九月八日

伊太利婦人の油絵（原田先生作）写し始む九月十五日始めて水彩写生にゆき二枚を得たり（中川付近）九月十七日油絵小風景かく九月十八日油絵田家小景の図をかく原田先生の補正を受くる筈にて同先生の許へ托す九月二十一日より此月中高山依頼の風俗若くは風景の小油絵五枚かく九月二十九日油絵写生（中川付近）一図を得此図郊外小景と題して明治美術会の展覧会へ出品す十月二日水彩写生一枚（川の際）十月十日某外人の筆香港市街水彩画の模写にかゝる十月十三日水彩写生一枚（井の頭辺）十月十七日水彩写生式枚（目黒）十月二十日水彩写生二枚（品川、羽根田）十月二十九日水彩にて目赤不動本堂写生にかゝる十一月二日同図出来十一月五日水彩にて不動の門を写生にかゝる同九日出来十一月六日水彩壹枚（戸山）十一月十一日水彩写生二枚（七国峠、小倉）十一月十二日同二枚（半原、塩川）十一月十三日同一枚（宮ヶ瀬）同二枚十一月十四日（高雄山、小名路）十一月十五日同二枚（八王子、日野）十二月三日油絵半原の景に着手す十二月十二日水彩写生一枚（千住）十二月十五日水彩根津神社の写生にかゝる同十九日出来十二月十九日香港市街の模写出来す十二月二十四日根津社門を水彩にて写生にかゝる同二十七日出来

十二月九日研精会へ始めて入会す ○秋季展覧会へ油絵一面出品す三月一日文のいさふ（李白の伝）の原稿を書く四月七日むさしの、春（鳩ヶ谷紀行）を作る四月十四日三咲の春色（三咲紀行）を作る四月十六日日本新聞社へ三咲行吟の俳句を投ず四月二十六日日本新聞社へ裸体画論を投ず六月二十九日菊目石（鎌倉、江の嶋紀行）を作る七月十一日京みやげ（京都紀行）を作る八月二十七日原田先生

と兩名にて明治美術会へ書を投ず八月二十八日同第二の投書を為す
八月三十日京都行吟の俳句を日本新聞社に投ず十月二十六日散歩行
吟の句を日本新聞社に投ず十二月十日嬉し記を家庭雑誌社に投ず十
二月二十一日行く秋の山路（相模紀行）を作る

八月十一日より一ヶ月程原田先生の機械によって写真術を練習す現
像液の粗悪なるため完全の結果を得ずして終る

年の春頃より屢々英語学の独習を試む

読書は玄洞放言、早稲田文学、風俗画報、礼氏絵事弁、画学論、葛
飾北齋伝、江戸旧事考、アンゼロ伝、レンブランド伝、勅語文例題、
維氏美学、和洋礼式、物理学等

○旅行

明治二十八年に於ける旅行は前後四回に過ぎず五月五日友人森脇氏
と共に金沢に一泊し翌鎌倉、江の嶋を経て帰る七月五日単身東京を
発し六日京都有着博覧会を始め市中を見物し七日嵐山其他の郊外を見
八日疎水の遊船によって大津、石山、三井を巡り九日、伏見、宇治、
奈良を経て大坂に一泊し十日堺、住吉を見夫より神戸に出て一泊十
一日須磨舞子を遊覧し京都に帰り十二日京都出發十三日帰宅せり第
三次は九月六日友人早川を送らん為め森脇と共に川崎へゆき同夜同
所に一泊し大師を詣り帰る最後は友人真野氏と共に十一月十一日出
発八王子、窪沢、小倉等を経て半原に一泊（神奈川縣津久井郡）十
二日塩川の瀧を写し田代に一泊十三日オロンド、宮ヶ瀬、鳥屋を経
て関に一泊十四日中野、山下を経高雄山に詣り小名路に三宅、木村、
渡部の三氏に会し爰に真野氏と別れ小名路に一泊翌十五日帰宅せり

夏期の旅行として修善寺に一ヶ月を過さん計画なりしも遠来の友あ
りしが為め果さず冬期新年の煩をさげん為館山へ旅行の心算なりし
も事情ありて果さざりき

○たのしみ

明治二十八年には余如何なる楽しみをうけしぞ曰く一月八日に友人
森脇氏と共に明治座に劇を見たり三月七日に兄大下氏友森脇氏と歌
舞伎座に劇を見たり四月五日に友人真野森脇の両氏と上野向嶋の花
を見たり四月十三日千葉縣三咲の花を見たり四月二十七日神田青年
会館に音楽をき、たり十月十二日同館に音楽を聴きたり十一月十五
日森脇氏と歌舞伎座に劇を見たり十二月十八日靖国社に花火を見る
読書のたのしみは小説あり紀行あり新聞雑誌あり重なるものを挙く
れば日本新聞（毎日）国民新聞（一月より三月頃まで）中央新聞、
讀賣新聞（時々）文学界、國民の友（友人に送る分）風俗画報、早
稲田文学、太陽、家庭雑誌、文学界、日本風景論、源氏物語、中務
内侍日記、和泉式部日記、全世界一大奇書、讀岐典侍物語、蜻蛉日
記、漢城の残夢、大和物語、唐物語、一代女、傾城禁短氣、奴の小
万、義経記、濱松中納言物語、土佐日記、今國稚爺、むら竹、海賊、
依縁軒漫録、枕頭山水、帝國文学、白峯村、さらし那日記、二人女、
枕草子、当世女学者、少年園、恋のやまひ、闇の梅、川添柳、高調
洋箏一曲、緑葉嘆、瑞西館に歌をきく、夜のふしき、ふた夜、壁を
懐て罪あり、深山木、蓮葉娘、当世商人気質、われ茶碗、たんでつ
場の主人、三筋町の通人、三人銃卒、其他小説類及熱海、修善寺、
函根、塩原、下野、秩父、甲府紀行等

明治二十八年が余に与へし楽しみは概略は以上のごとし

○家族と親戚

明治二十八年の母上は常に病み勝にましませり作夏子宮にさわりを生ぜしより引続き神田錦町の鈴木国手へ隔日車にて通ひ給へり九月中少しく軽快を覚ゆるとて医を廃せしが爾後も一週一回位は床を離れ給はぬ事あり朝も晏起し給ふが常なり平素滋養の食物を多く用ゆるの外牛乳二合或は一合を用ひ給へり

母上の下婢を伴ひて本郷の通り靖国社等へ折々散歩し給ふの外他は墓参親戚の訪問の類に外出し給ふのみ七月十七日よき機会ありて兄大下氏を保護に頼み日光見物をなし給へり十月二十八日は神田の親類高山氏へ行き一泊せられたり

義兄大下安太郎氏は余が営業を管理して真砂町の家にあり昨十二月の末日広嶋へ軍馬の輸送にゆき爾來屢々神戸大坂へ同様の事にて行けり十一月初旬真砂町の邸を売却せるに依て隣地三十七番地へ転ぜり十二月二十八日給八円を以て根元の雇となる

亡姉の夫たりし松本市太郎氏は兼て皇宮警視の職に在り居を永田町伊東邸に占めしが九月岩倉家にて雇十月初旬同永田町二丁目二十八番地へ転ぜり

姉の夫たる高山権三郎氏は神田連雀町なる三井家の家屋を払下げ大に旅人宿を拡張せんとて八月初旬より工事にかゝり十月下旬出来せり十二月下旬より権三郎氏病氣となり年を超ゆ

○交際

明治二十八年に於て余の新たに得たる友少なからず又殆ど交の絶へんとする友もあり左に親しき方より順次列記せん

中丸精十郎先生は余の師なり時々伺候して作品を見せ高説をきく十月十三日郷里甲府に男廉一氏を伴ひ旅行され十一月十五日俄に病を得て逝かる十一月二十六日はそが葬式なり遺髪を埋葬せるは谷中瑞輪寺とす

原田直次郎先生一月以来一週一回ほど訪問を怠らず先生病のため常に臥床にあり訪ふ毎に欣びよく談ず画論及学説余の作画の批評皆千金の語にて裨益少々にあらず余の不才を捨てずして毎に奨励せらるゝ余の真知己として忘るべからざる処なり

真野紀太郎君 余が尤も心を空ふして交り親密なる事同朋も畜ならざるは実に君を以て其最初の一人となす余が君の家を訪ふ殆ど吾家の如く君の父母を見る殆ど吾双親の如し而して君の余が家に到るや同じく他家に入るの感なきが如く敢て吾家人と異なるなき様にて互の居の一里半余を隔るにも拘はらず毎月数回相往来し又屢屢余の家に泊して夜々共に語り明す事あり平素學術上に於ても互に相奨励し一図成る毎に相示して批評し且研究して怠らず余は常に此君を以て信の益友なりと思へり

早川銚太郎君 余と意気投合するの友惜む哉身は福岡に在りて三百里を隔つ互の書信は連月二回を下らず盛夏の頃校用を兼ねて出京し一ヶ月程余が真砂町の家に在り毎日相逢はざるなきに猶飽き足らず終には連夜余の家に泊して歓快をつくせり真野君も常に余等と樂を同ふせり

森脇英雄君 会心の友余が昨年来の失策に就て大に力を尽されたり遠慮なく相語る事を得るもの真野森脇の二氏のみ早川君ありと雖も地を異にせり

三宅克己君 君のために益を得る事少なからず君は水彩画の名手談ずる処も確として軽薄ならず此年に於て余との交際大に親密になり二月清国へゆき兵役の苦を経て五月凱旋し以来不断旅行を専らとせられぬ

田中慶之助君 談論を好み余が言葉敵として尤も有益の友なり今は郷に去て折々の信書に交情の冷を避くるのみ

上田丹厓君 春一度上京して訪はれたり以来西国にありて時々信書を通ず

水野治郎、田淵保、山中古洞、中丸廉一、木村光太郎、有吉秀太、大久保雄輔、藤村知子多、大森安久太郎、森岡健夫の諸君とは時々往来せり

岡部昇丸君 北海道に在りて屯田砲兵に属せり晩春上京屢々相往来せり帰北後信書の往復を為す

川鱒倭文君 越後に在り信書に依て互の消息を通ず

中沢弘光、和田英作、岡田三郎助、藤嶋武二（在津）、小笠原倫太郎、根岸棟吉、後藤貞行、湯浅順四郎の諸君とは交際を持続せり青木秀雄君とは交通絶つたり

新に得たる友には渡辺審也、小川利八郎、上野鋭郎（二月中）伊藤快彦（七月京都に於て）野瀬鶴次郎（二月中）矢野覚一郎（十一月中）藤井乙男（八月中）の諸氏あり尚吉田秋香氏（十二月）あり
浅井忠先生 一二回訪問せり

森林太郎先生 原田先生の紹介に由て十一月三日初めて逢ふ同日上野展覽会へ行き帰途会食し将来の交を約す
以上は単に美術に関する人々のみ他の新交際は氏家廣精（十月中）山田梅次郎（十二月中）等他数人あり従来の知人に於て格別の異同ある事なし

○くさぐさ

明治二十八年の経済は正しき決算を為す事難かりし整理の緒につきしは十月にて以来一ヶ月金貳拾円を以て吾家の生計を営まんと決せり十二月三十一日に於ける現在の財産は地所百三十九坪余建物三十八坪、諸道具調度衣服の類三井銀行の定期預金貳千五百円當座預金百九拾円余現在金若干貸金六百円財産全額合計凡金五千円也

十一月 吾家の東北隅に半坪余の物置を建増せり

一月五日 朋友数名を招て新年の宴を張る

一月十四日 明治美術会の新年会に臨む

二月二十六日 高山氏より余に嫁女を勧めらるる外国行を以て拒む

三月三十日 亡父三回忌の法会を営む

五月十七日 亡父君の前妻亡秋月院の三十七回忌法会を営む

六月五日 亡妹壱週忌の法会を営む

七月十日 本郷田町に火あり真砂町の家隣地迄延焼す

余は衣服調度の事を左に記すべし

四月余の節糸織の袷を新調す 五月夏羽織を新調す母上糸織の袷を新調す 八月早川の贈品にて余の単衣を新調す同森脇の送品にて余の単衣を新調す同青木の贈品にて母上の単衣を新調す 十月ヘル

地立襟の洋服を新調す 諸糸織綿入及び瓦斯黒紋付の袷羽織を新調す

母上諸糸織の綿入を新調す 十一月写生用傘を作る オーバーコートを購入す 重ね筆筒を求む 十二月縮毛布及母上肩掛を新買す 明治二十八年は余に節儉の徳を教へたり余は外出に車を廃して大なる経費を助け其他従来無益に且無心に費消せし幾多の雑費を減せり

明治二十八年の事挙げ来れば稿を代ふるも及ばざるべし以上は只其要を摘で後日の便に供するのみ

完

尚記すべき事あり従来に於ける総ての負債は此年十月悉皆返却し一錢も残さず

而して他の貸附金は大略金六百円余あり神田連雀町にさゝやかなる家あり常に厄介視せしが此年初夏の頃高山兄の世話にて売却せり

明治二十九年の記

明治二十九年の事を記す

○

明治二十九年は余をして一大変調の境に投ぜしめたり余は此年に於て寡居孤独人生至樂の家庭を失ひたり不幸何者か是に如かんざれど自然の結果是を捨て彼を取るの方法に出るの止を得ざるを如何せん余は家を失ひたり乍併更に新しき希望を得たり人生の行路豫め量を知り難し余は暫く此境に満足し只管余が希望を達する事を勉め将来余が常に理想せる円満幸福なる家庭を作らん事を期すべしあはれ明治二十九年は余を如何に弄びしか其大要を摘んで後日の鉞とす
明治三十年初夏 大下藤次郎手記

○日記摘要

新正の式極めて平和にすませ年頭にゆく(一月一日)
真野氏を訪ふ森脇氏同行す往を語り来を談じ快を極む(二月八日)
徴発馬匹評価委員に任命せらる(一月九日)
房州へ旅行し館山服部氏に投ず(一月十六日)
館山にて小松氏に滞留と決す(一月十八日)
北の方海岸に遊び加知山に一泊す(一月三十一日)
館山へ帰る(二月一日)
館山出発根本へゆき海潮寺に投ず(二月八日)
根本を発し千倉に一泊す(二月十日)
千倉を発し天津に一泊す(二月十一日)
天津を発し上総一ノ宮東金屋に投ず(二月十二日)
一ノ宮出発飯塚に中村を訪ひ同夜帰宅す(二月十四日)
真野氏飲酒して来り大言を吐く同夜一泊す(二月二十三日)

- 音羽護国寺へ写生にゆく (三月七日)
音羽護国寺写生にゆく (三月九日)
母及びせいを連れ上野浅草向嶋等終日遊覧す (三月十日)
音羽護国寺へ写生にゆく (三月十四日)
神田高山の娘等を連れて上野へゆく (三月二十七日)
昨夜賊あり余の衣類を盗まる (三月二十九日)
上野美術学校成績展覧会を真野氏と共に遊覧す (四月三日)
松本氏と共に上野に展覧会を見る (四月五日)
森林太郎君大人逝去に付葬送す (四月六日)
京坂旅行のため夜分出発す (四月十日)
夜十一時奈良に着大文字屋に投ず (四月十一日)
奈良を発し畝火を経芳野河畔六田に一泊す (四月十二日)
六田出發吉野に桜に飽き多武の峯紅葉館に投ず (四月十三日)
多武峯出發初瀬を経て奈良に帰る (四月十四日)
奈良出發笠置木屋館に投ず (四月十五日)
笠置出發大阪を経て京都鶴屋に投ず (四月十六日)
若王寺に伊藤氏を訪ひ二条に仮寓を求めて移る (四月十七日)
八坂及清水へ写生にゆく (四月十八日)
五二会品洋会及び美術展覧会を見る 清水へ写生にゆく (四月二十日)
山本春拳を訪ふ (四月二十二日)
北野へ写生にゆく、夜都踊を見る (四月二十三日)
東寺へ写生にゆく (四月二十四日)
上下加茂へ写生にゆく (四月二十六日)
- 銀閣寺へゆく (四月二十七日)
梅宮神社及嵐山へゆく (四月二十八日)
三条市街に写生にゆく (四月二十九日)
大極殿を写生す (五月一日)
仁和寺へ写生にゆく (五月二日)
清水へ写生にゆく (五月四日)
伏見稲荷に写生にゆく (五月五日)
太秦へ写生にゆく (五月六日)
黒谷市街を写生 (五月七日)
宇治へ写生にゆく (五月八日)
清水へ写生にゆく、旭館に写真を撮る (五月九日)
男山へ写生にゆく (五月十日)
清水へ写生にゆく (五月十一日)
伊藤氏と共に鞍馬山及貴船へゆく (五月十二日)
清水貸金の事に付神戸へゆく大関氏へ一泊す (五月十三日)
神戸にて布引其他見物午後京都へ帰る来状可驚事を報ず俄に帰京に
決し中夜發の汽車に投ず (五月十四日)
帰京す汽車中に盗難にかゝる (五月十五日)
真野君と共々浅草にバノラマを見る (五月二十日)
母病重り就床 (六月八日)
祇園の図を真野氏に送る (六月十一日)
三陸地方大海嘯あり (六月十五日)
川鯨倭文氏越後より帰り来たる (六月十八日)
上野に征清油絵を見る (六月二十一日)

神田の姉来る（七月十三日）
 真野氏と共に弁天已待にゆく（七月四日）
 上野音楽学校の音楽会へゆく（七月四日）
 母断縁及座光寺再興の届を出す（七月二十五日）
 入谷の朝顔を見る真野氏及山中氏同行す（八月三日）
 真野と共に王子権現の祭を見終日遊びくらす（八月十二日）
 現住地所建物を売却に付藤村と約束す（八月二十日）
 母の不都合により戸籍を別にし別居し終身年金を送る事に談判し決了す（八月二十七日）
 余は孤身追分町三十八番地浅川方に下宿す（八月三十日）
 長持類を真野氏に預く（八月三十一日）
 追分町三十一番地の家を藤村氏に引渡す（九月一日）
 英語学校へ通学し始む（九月二日）
 森脇氏米国行に付富士見樓の送別会に臨む（九月八日）
 森脇氏米国行記念のため小川に於て写真す（九月十三日）
 森脇氏米国行に付送別のため横浜へゆき本船まで見送る（九月十四日）
 日）
 櫻井氏と共に終日散歩して遊ぶ（九月二十日）
 音羽護国寺に写生にゆく（九月二十二日）
 真野氏と共に千住に水彩写生にゆく（九月二十七日）
 根津写生にゆく（十月四日）
 松本市安兄と共に江の嶋鎌倉等に遠足す（十月十一日）
 真野氏と共に平井地方へ写生にゆく（十月十七日）
 座光寺年金を廃し一時に申受旨請求さるゝ故右に決行す（十月十八

日）
 橋場へ写生にゆく（十月二十日）真野氏と共々板橋に写生す（十月二十二日）
 水彩展覧会に水彩画出品す（十月二十三日）
 上野音楽学校の同声会へゆく（十月二十四日）
 多摩川上流写生旅行のため真野氏宅に一泊す（十月三十日）
 真野氏及石川氏と共に西多摩郡小丹波へゆき長屋に投ず（十月三十一日）
 日）
 棚沢に写生にゆく（十一月三日）
 川合辺を写生す（十一月五日）
 小丹波出発氷川へゆき三河屋に投ず（十一月八日）
 氷川出発小丹波に帰る（十一月九日）
 小丹波出発青梅に一泊す（十一月十日）
 帰京（十一月十一日）
 先師中丸先生一週忌にて招待をうく（十一月十五日）
 日暮里に写生す（十一月十八日）
 日暮里に写生す（十一月十九日）
 日暮里へ写生にゆく（十一月二十日）
 日暮里へ写生にゆく（十一月二十一日）青年会館に音楽をきく（同日）
 日）
 巢鴨に写生す（十一月二十三日）
 赤羽根へ写生にゆく（十一月二十四日）
 根津神社写生す（十一月二十七日）
 根津神社写生す（十一月二十八日）

大森付近へ地所を見にゆく(十二月二日)

根津神社写生す(十二月三日)

鶏声ヶ窪を写す(十二月四日)

真野と共に角筈村獨立女学校慈善会へゆく(十二月五日)

巢鴨を写生す(十二月七日)

雑司ヶ谷に写生す(十二月十日)

売却地所登記のため麴町登記所へゆく(十二月十一日)

上野学友会の音楽をきく(十二月十二日)

柿の木三本、梅一鉢真野氏に預くる(十二月十三日)

藤村と共に隅田川に水雷を見る(十二月十八日)

雑司ヶ谷写生す(十二月十九日)

大森近傍地所見分にゆく(十二月二十一日)

正午出発沼津に一派す修善寺旅行のため(十二月二十三日)

沼津を発し修善寺新井に投宿す(十二月二十四日)

○家及余

余は駒込追分町三十一番地なる自宅に於て嫫しき新春を迎へたり家族は母一人にして他に雇少女一人あり一月十六日より二月十四日迄安房上総を旅行す同四月十日より五月十五日迄京都奈良吉野神戸の辺を旅行す豫ては九州地方へも行き年末にても帰京の筈なりしが可驚報を得て俄に東歸せり

次で余は家計上前途の見込もあり業未だ完からねば妻帯も望ましからず機あらば外国に遊学もしたく且現住の地欠点多く他に転せんかとの考もありしかば一同退散と決し九月一日引渡の約にて一切売却

せり手廻り世帯道具の類も不要に属する分は何れも売却す

繼母には年金六拾円終身之を与へて断縁せん事親戚等の意見なり然るに五月頃より兼ての病氣急に重り就床中故漸く延び八月廿七日に到り松本市太郎、大下安太郎、松本かな立会にて申渡し爰に全く契約取為換をなす

余は家庭を失ひ住居を失ひたり依て近傍なる下宿屋浅川に寓居と決す俄の不自由大に困難を覚ゆ

此年十月十八日座光寺より更に申出あり終身年金を廢して一時払を受取度し金額は參百円にてよしと依て更に親戚に議し決定し申込に應じ大下安太郎、橋本堯尚立会にて金高引渡を為す

十一月一日より十一日迄多摩川上流を友人真野石川両氏と共に旅行す十二月二十三日よりは伊豆修善寺温泉場に在て年を送る

○起居

午前七時起床 身体をぬぐひ業ある時は画室暖炉に火を焚し食事後暫時新聞を見九時より午後四時頃迄画に従ひ入浴(月五六回)後散歩し夕食済みて後二時間英学を勉め後読書し従事就眠す(一月中)(二月中)(三月中)

午前五時三十分起床八時就務昼間少しく休息し五時迄執筆夕食後庭園の草などとり十時就寝他は春の頃と同じ(四五月中)

午前六時起床他は前月頃と同じ(六月中)

午前五時四十五分起床七時鐘美館へゆき正午帰宅夫より休息夜間の事務前に同じ(七月八月中)

午前五時三十分起床午前中執筆午前十一時昼食十二時迄休息夫より

英語の復習二時半より猿楽町英語学校に通学五時半帰宅夜分英語の復習十時就床（九月二十一日手記）

十月十一月十二月の頃は午前六時より七時迄の間に於て起床し他は前月の如し

○思想

昨真野氏と語るらく吾等は前途洋々有望満足なる新年を迎へたりといふべし生活に於て急なるにあらず業務の忙なるに非ず身は健に意志堅く加之技術に於て研磨の望あり吾かとのる処の業社界に歓迎せらるべき見込あり幸福なるかなと（一月五日）

余は此年内に於て安房、大磯、小田原、伊豆、京都、大和、中国、九州、塩原、松嶋、水戸、日光等の内出来得る限り旅行せんと欲す（二月七日）

余か家庭は不調和となれり余は是を機として兩三年海外に遊ばんかな仏か独か果た米国か（五月二十九日）

欧州物価高く費用に耐へず止む事なければ明年を期して米国に航せんかな修めんと欲する処は水彩画なり（六月三日）

あらゆる艱難に耐ふべき兵士になりしと思ひ余は明年春夏の候を卜して桑港に航し自活するを得は三年間然らざれば二年間在留して水彩画を学び仏語を修め後賣金の都合にて半歳或は一年を巴里に送り研究を試みんと欲す今や急務は英語の会話なり今回の母の所分落着せば余は直ちに下宿すべし庭園家屋何かあらん売却して吾が財産の整理をなさん前途多望なり但少しく困難を感じるは後事を託するの適當の人を欠く事是なり（六月八日）

余は弥よ今日を以て吾家庭を破壊したり余は晚景学校より歸るや浅川樓上の一室に入て慨然涙を落せりア、余は既にホームの樂を失ひたるなり語るに人なきア、吾に慰藉を与ふるものなき此六畳の小室に起臥して只未來を想ふのみ余は何故に好んで斯く不自由なる境遇に入り且つ至難なる語学を修めざるべからざるや是蓋し余が未來の樂を貪らんがためのみに非ず実に座光寺けん其人のために斯る境遇に投ぜられしなり乍併此事や將來却て大幸福の基とならずとせず徒に歎ずるは男子の事に非ず宜しく憤然元氣を發揚すべし唯思ふ家に歸るも迎ふるの人なく汗に湿ひたる衣■もすゝぐの人なく衣を始末し履物を払ふの人なきをア、（九月一日）

余は邸地を求めん欲す余が後來あた、かき家庭を作るの地を撰んで大森停場の近き丘陵の上とせり朝に夕に太陽及月を見るべき品海一望の下鈴ヶ森の松並木永く青紫を画くの處空氣清く地靜に汽車の便ありて不自由なき此大森村新井宿の辺に小なれ共都合よき家屋を作りて好める庭園を設け尤も質実に且和樂に生活せんと欲す余は此問題の為今多少の心を

勞してあり（十一月廿日）

余は如何なる果報のあれば折柄年の暮とてなべての人々のいそがはしき中を身に病とてあらぬにかく温泉場に遊びて暮す事を得るにや愛と幸福の源なる家庭もなく事ある折にたのみにすべき親しき人とて少なければそれ等をかぞへなんにはうらかなしき身にはあれど世には吾れと同じく否我よりも更に悲しき境にさまよふ人もありて必ずしも吾れと同じき樂しみをうけてはあらじ大方は此年のせきを越しかねてこゝ七八日の間をさまゝまに心を碎くなるべしざるを我は

つゆ程も心にかゝる雲もなく未来はかくなぞいたづらに空想を画きて悠々たる日をおくりてあるは慥に一方の悲しみを償ひてあまりある事ならんさて此幸福は誰によりて得つる思へば有難きは亡き父上なり実には父上は吾が志す業をなすに余りあるの資を残し給へり亡き姉君も又我に鮮少なぬ教を残し給へり我は日頃此高く且つ深き恩を忘れざるなり不幸われにさせる芸能なきも志は堅し父上姉君の洪恩に酬ゆるは我が名をなすに如し我は胆にきざみて此事を銘記すべしあはれ在天の霊よ願くは我を助けたまへ(十二月二十四日伊豆修善寺に於て)

○健康

感冒にかゝる(一月二十五日安房に於て)感冒治す(二月廿八日)少しく頭痛を感ず(六月二十一日)下腹部に微痛を覚ゆ(七月廿四日より廿七日迄)感冒にかゝる(九月五、六日)頬少しく腫る(十月十八日)

○学事

重に水彩画を描けり旅行及東京近傍写生にて凡て一年間凡六十枚ヒルデブランドの水彩画模写五枚他三枚有坂肖像油絵一枚亡妹まさ肖像油絵一枚意匠画油絵三枚写生油絵二枚伊太利婦人油絵模写一枚鉛筆画模写数枚

英学は六月一日より自修し九月二日より日本英語学校に入り会話を修め十月三十日退学す
菱花湾日記、うきくさ日記、王子紀行、送別紀行、鎌江紀行、秋の多摩川等の紀行類を作る

○娯楽

浅草及上野を家人と共に遊ぶ(三月十日)上野音楽学校に海嘯義捐音楽をきく(六月二十一日)上の弁天に巳待の琴曲をきく(七月十四日)王子に一日を暮す(八月十二日)兄弟三人連にて江の島及鎌倉へゆく(十月十一日)教育費義捐音楽を上野音楽学校にきく(十月二十四日)青年会館に音楽をきく(十一月廿一日)角筈独立女学校に音楽をきく(十二月五日)上野音楽学校に同声会の音楽をきく(十二月十三日)隅田川に水雷発射を見る(十二月十八日)

○経済

邸宅類は金壹千六百七拾円に売却せり諸道具類は凡金貳百円に売却せり十二月三十一日現在の財産は三井銀行預金貳千六百円安田銀行預金千三百八十円貸金凡六百円調度類参百円合計四千八百八拾円なり但し座光寺払渡は他に金参百円あり
衣類及調度の新なるもの諸糸織袴せ壹枚同羽織壹枚(三月三十一日)諸糸織袴一枚(四月二日)めくらじま羽織壹枚(四月三日)洋傘壹本(五月二十日)縮緬帯壹本(五月三十日)黒三ツ紋一葉羽織壹枚仙台平袴壹具(九月八日)紺ヘル背廣袴ズボン及黒一本綾モーニングコート紺鉄縞ズボンセル地オーバート類注文出来(九月二十四日)

○読書

新聞には日本、時事新報を首として購買し臨時諸新聞を見たり雑誌はめさまし艸を首とし臨時太陽、文学界、世界の日本、大日本、国民の友、早稲田文学、うらわか艸、風俗画報、文芸倶楽部、新小説、

少年園、東洋絵画叢誌、日本英学新誌、英字新聞研究録、家庭雜誌等なり

書籍には聖書、鶉衣、枕艸子、十六夜日記、弁内侍日記、竹取物語、伊勢物語、紫式部日記、源氏物語、つれづれ艸、住吉物語、四季物語、方丈記、航薇紀行、筑紫紀行、好色二代男、堤中納言物語、とりかへばや物語、落久保物語、十訓鈔、日本永代蔵、本朝商人気質、本朝二十不孝、男色大鑑、武道伝来記、傾城吉岡染、公事根源、俗つれづれ、胸算用、本朝樓■秘事、菅原実記、白百合、水鏡、ます鏡、八笑人、笛吹川、新葉未集、織留、峯の残月、ひとり寝、雲の袖、菊の濱松、さゝ舟、たけくらへ等

○家族及親戚

大下安太郎兄駿河台根村家へ日々通勤する事となる(二月廿二日) 母常に病患ありしが一時医薬を廃せしに又々再発就床す(六月八日) 母身上大不都合ありそれとなしに大下家を断縁し座光寺の相続人となす(七月二十五日)母の病癒ゆ(八月三日)親戚立会にて母の不都合を曝露し公然断縁す(八月二十七日)兼て母に年金附與の約ありしも本人の請求により一時に支払て全く関係を断つ(九月十八日) 座光寺家のため法事を営む(六月六日) 市原の老翁死す(七月二十一日)

○交際

此年に於て最も親密の情をませしは三宅克己君なり君は朝鮮に守備としてゆかれぬ依て余は一ヶ月一二回必ず信書を致すに君はそを尤

も喜ばれ文書上一層の情交を結べり繼て藤村君とも稍や近くなれり 同氏元来一個の蕩児余は平素敬して遠くるの主義をとり居りしが本年地所売却の後新に新婦を娶りて品行を正されしをもて大に交際に張合を生じ且は住所も接するを以て日々親密になれり不同舎の石川君も互の心胸を語るの友夏井吉田渡辺等の諸君とも前年より幾分か近しくなれり真野氏との交情は元より異状あるべくもなく早川君とは相見されども常に■紙を以て意を通ぜり在京都の伊東氏には在洛中種々の厚意を受け随て語心の友たり

三宅克己君豫備召集にて入営す(三月廿八日)

山本春拳氏に初めて面会す(四月十八日)

森林太郎氏の父君逝去さる(四月六日)

初めて石川君に面会す(六月中)同時櫻井氏に会す

夏井氏に面会す(七月中)

藤村君妻帯さる(十月二十三日)

森脇君米国へ渡航さる(九月十四日)

○雑事

徴発馬匹評価委員を命せらる(二月九日)

盗あり余の衣服和洋共冬物三十余点洋傘、帽等を奪ひて去る(三月廿八日)

汽車中に懐中時計を奪はる(五月十五日)

市ヶ谷光徳院観音堂及本堂の一部普請に付き金貳拾五円を寄附す(六月九日)

松本市太郎氏に道具類を預く(八月三十日)真野君へも同断(八月三

十一日)

上の水彩画展覧会へ水彩四十枚出品す(十月七日)

※判読できなかった文字は■で表した

【論考】

本稿では、前回に引き続き、大下藤次郎の日記のうち明治二十八年、二十九年分に記された内容を紹介した。

明治二十八年は、大下藤次郎が画家として本格的に活動を始めた年だった。前年からの日清戦争が終結したこの年、父より引き継いでいた軍馬の宿泊業が盛況で少なからぬ収益があったが、貸家業の採算がとれなくなっていたこともあり、親戚と相談の上、土地家屋ならびに軍馬、旅人宿、貸家業の経営を手放した。そして追分町に新たに居を構え、いよいよ画業に専念することになった。

この年の「学業」すなわち制作の記録を概観すると、年の後半には水彩画の写生を試みているものの、まだ油彩画制作が主となっている。家族や知人の肖像画を描いたほか、油彩による風景画や風俗画も制作した。いくつかの作品は依頼を受けて制作されており、絵画によって幾ばくかの収入を得られるようになっていたと推測される。

この年には一週間に一度は原田直次郎を訪ね、病床の原田より様々な指導を受けたようだ。九月十八日の記述に「油絵田家小景の図を

かく原田先生の補正を受くる筈にて同先生の許へ託す」とある。大下藤次郎の油彩画として現在唯一確認されている《野の道》(図1)は、原田直次郎の風景画の小品(東京藝術大学大学美術館蔵《風景》、石橋財団石橋美術館蔵《村の風景》など)と描き方がよく似ている。また、石橋財団ブリヂストン美術館所蔵の原田直次郎の画帳(図2)には、大下の《野の道》と同じモチーフ(農家の家族、三本の立木、積み藁など)が描かれた水彩画が含まれている。これらのことから《野の道》は制作年不詳ながら、明治二十八年頃に原田直次郎の指導のもと描かれた作品ではないかと考えられる。ちなみに大下はこの年九月に「中川附近」を描いたという《郊外小景》と題した「油絵写生」を第七回明治美術会展に出品しているが、どのような作品かは明らかでない(同展出品目録には同じ題名の作品が二点掲載されている)。

十月以降は、家業から手が離れたため頻繁に写生に出かけられるようになり、水彩画の制作数も増えた。九月十五日に初めて行ったという中川付近での水彩画写生のうちの一枚と考えられる作品が、当館蔵の《つり》(15/9 2555の書き込みあり。2555は皇紀かII図3)と考えられる。そのほか、この日記の「学業」欄に記された写生のうち、当館蔵の水彩画作品と写生日または写生地が一致するものに、以下のものがある。「十月十三日水彩写生一枚(井の頭辺)」「(日付が一致)」「十月十七日水彩写生式枚(目黒)」「(日付が一致)」「十月二十日水彩写生二枚(品川、羽根田)」「(日付が一致するもの二点あり)」「十一月六日水彩壹枚(戸山)」「(地名が一致)」「十一月十一日水彩写生二枚(七国峠、小倉)」「(日付が一致する)」「武州七国

峠」と記された作品あり(Ⅱ図4)、「十一月十二日同二枚(半原、塩川)」「(日付が一致する「相州塩川瀑」と記された作品あり(Ⅱ図5)、「十一月十五日同二枚(八王子、日野)」「(日付が一致する「八王子河原」と記された作品あり(Ⅱ図6)」。また、七月の京都旅行の際に描かれたと考えられる京都のスケッチが二点存在する。

この年は交際の範囲が広がり画家の友人も増えていた。「交際」欄で特に注目されるのは十一月三日に原田直次郎の紹介で初めて会ったという森嶋外である。明治美術会の展覧会を見た帰りに会食し、「将来の交を約」したという。嶋外は後に、若くして亡くなった大下を主人公に小説「ながし」を執筆、また大下の遺作集に収録された「年譜」を執筆することとなった。

そのほか注目される事柄として「思想」欄の十二月三十日の記述、「吾は絵画の中何れを専修せんか」という自問自答のくだりがある。人物画が苦手であることを自認していた大下は、ここで「風景画に従事せんとす」と宣言する。ただし「一生一図」は「人物画の内尤も自然に近く且高尚なる宗教的歴史画」を描いてみたいとも述べている。歴史画を絵画制作の最上位に置くこの考え方に、森嶋外や原田直次郎の歴史画に対する思想の影響をみることができる。

翌、明治二十九年は、さらに旅行の機会が増えた。九月以降は一人暮らしとなったこともあり、より自由に制作に打ち込めるようになった。写生画の件数も、ぐっと増えている。「日記摘要」に記された旅行先の地名のうち、同年制作で当館蔵の作品と合致するものに、館山、小丹波(図7)、日暮里、修善寺があるほか、京都の寺院を描いたと思われる作品が五点ある。

この年は主に水彩画を描いたようで、「旅行及東京近傍写生にて凡て一年間凡六十枚」と数えている。油彩画は肖像画二点、意匠画三点、写生油絵二点、模写一点の、計八点のみであった。「ヒルデブランドの水彩画」とあるのは、原田直次郎が所持していたドイツの画家エドゥアルド・ヒルデブランドの水彩画の版画で、三宅克己も模写したものと同じと思われる。(三宅克己『思ひ出つるまま』参照)。

十月には上野で開催された水彩画展覧会に四十点もの水彩画を出品した。これは、十一月二十日より十五日間にわたって開催された日本最初の水彩画のみの展覧会とされる「明治女学校新築費義捐水彩画展覧会」のことではないかと思われる。大下が出品したのが十月、展覧会の開催が十一月と、一ヶ月のずれがあるが、「出品の画数五百有余枚皆當時健腕の洋画家が手になりたる者」という大規模な展覧会で、大下が四十点もの水彩画を出品する機会があったとは考えにくい(『絵画叢誌』第百十九巻、明治二十九年十二月)。五百点あまりの出品のうち一割近い四十点を大下の作品が占めていたとすると、「當時健腕の洋画家」と見なされたかはともかく、大下がこの展覧会において存在感を見せたことは想像に難くない。

このような動きから、明治二十九年は大下藤次郎の、水彩画家としての始動の年であったと位置づけられる。

そのほか、明治二十八、二十九年には引き続き紀行文を数多く執筆している。ここに記録された紀行文は「落葉集」と銘打った文集にまとめられたものも含め、現在、当館の所蔵となっている。当館蔵の草稿類一覧については前回の資料紹介を参照されたい。

(当館主任学芸員)

(主な参考文献)

三宅克己『思ひ出つるまま』(昭和十三年、光大社)

土井次義『水彩画家大下藤次郎』(昭和五十六年、美術出版社)

「もうひとつの明治美術―明治美術会から太平洋画界へ」展図録
(もうひとつの明治美術展実行委員会、平成十五年)

本稿においては、ご遺族のご意向により、美術史と関わりのない
プライベートな記述を一部削除しました。

本稿執筆にあたっては、株式会社美術出版社にご協力をいただき
ました。記して感謝いたします。



(図5)
大下藤次郎《相州塩川瀑》
水彩、紙 明治28年11月12日
当館蔵



(図1)
大下藤次郎《野の道》
油彩、キャンバス
当館蔵



(図6)
大下藤次郎《八王子河原》
水彩、紙 明治28年11月15日
当館蔵



(図2)
原田直次郎「画帳」より
水彩、紙
石橋財団ブリヂストン美術館蔵



(図7)
大下藤次郎《小丹波》
水彩、紙 明治29年
当館蔵



(図3)
大下藤次郎《つり》
水彩、紙 明治28年9月15日
当館蔵



(図8)
大下藤次郎と友人たち
明治29年9月13日撮影 当館蔵

(後列右より大下、大森安久
太郎、中列右より真野紀太郎、
森脇英雄、大久保雄輔、前列
右より中丸廉一、藤村知子多)



(図4)
大下藤次郎《武州七国峠》
水彩、紙 明治28年11月11日
当館蔵

石橋和訓のイギリス時代

真住 貴子

はじめに

本年度で没後八〇年となる石橋和訓（一八七六～一九二八年・

図1）は、現在の島根県出雲市佐田町に農家の長男として生まれた。幼名は倉三郎、後に和訓と改名。読み方は、かずのりが正しいが、わくんとも読まれ、特に地元ではわくんさんで親しまれている。幼い頃より画才に恵まれ、その才能を周囲が助力し育てた。最初は日本画（南画）からの出発であったが、松江に出て洋画にふれ、上京後も瀧和亭に南画を、本多錦吉郎に洋画を学ぶ。和訓は当時の洋画の興隆に危機感を覚え、洋画を取り入れた新しい日本画を創造したいとロンドンへ向かう。そしてロンドンでロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（以下RA）



(図1) 和訓イギリスのアトリエで

に入学、J・Sサージエントらに師事し、現地で肖像画家として大成。通算一九年のイギリス滞在の後に帰国し、日本でも肖像画家として活躍し始めた矢先に病で急死する。以上がこれまで知られていた石橋和訓の履歴の概略である。妻がイギリス人であり、生活の拠点をロンドンに残したままの突然の死は、彼のイギリス時代の消息を不明なものにしていた。作品も《美人読詩》（一九〇六年 島根県立美術館・図2）と《彫刻家》（一九一一年 東京国立近代美術館）が主に知られるのみである。これまで石橋和訓の研究は、和訓の死

後早い時期に書かれたであろう、書生仲間河邊榮養による私家版『石橋和訓画伯小伝』（以下小伝）、島根県立博物館の調査、林（佐藤）みちこ氏による論文^{(*)1}、生地佐田町の調査依頼を受けたトム・クロス氏の調査報告書^{(*)2}のみである。しかし、これらの先行研究の内、和訓のイギリス時代を追ったものは少なく、それだけではまだ和訓のイギリス時代を語るに不足している。本研究ではこれらの先行研究をふまえ、筆者が行った二〇〇一年の美術館連絡協議会の助成（海外研修派遣）による英国調査、二〇〇二年のポーラ美術振興財団（美術館職員の調査研究助成）による英国調査、二〇〇七年のイギリス調査、およびこれまでの国内調査の結果をもとに、石橋和訓のイギリス時代の詳細を述べる。これにより、明治末から昭和初期における日英美術交流を解明する一助としたい。

渡英からRA入学まで

和訓の渡英以前の履歴については、小伝をもとにした林みちこ氏の論文があるのでここでは繰り返さない。一九〇三年二月二日^{(*)3}、和訓は上杉謙章、小笠原長幹両伯爵の欧州遊学に随行員として中條精一郎、井上匡四郎、三土忠造とともにロンドンへ向かう^{(*)4}。日本は前年の一九〇二年にイギリスと日英同盟を結び、同盟国としてイギリスと深い外交関係を結んでいた。和訓は私費留学という形でこの日英関係のよき時代にイギリスへ滞在する幸運を得たのである。このことは、和訓の長い滞英期間中を通じて非常に有効に作用することとなる。

明けて一九〇四年にロンドンに到着した和訓の行動を追うと、五

月にはケンジントンの私画塾に通っていたことが、現存する最も古い和訓から実家への手紙で確認^{(*)5}できる。手紙には、「ケンントンベインティングスクール」へ毎日五里の通学をしていると書かれている。このケンントンとはケンジントンのことであろう。現在は高級住宅街となっているが、当時のケンジントンは、R Aを卒業した画家がアトリエを構え、私塾をひらいて絵を教えていたエリアで、外国からの留学生はまずこのエリアで絵をならうのが定番のコースであり、和訓もそのコースを歩んだということであろう。手紙の住所はストレイタム・コモン (Streatham Common) とあるので、ロンドン中心地より南に一〇キロほど離れた場所に間借りしていたようだ。ほとんど英語ができないまま渡英した和訓は、最初、得意の絵でイギリス人と意志の疎通をはかったようだ。また幸運な事に、当時ロンドンの日本領事館には和訓と同郷の坂田重次郎（一八六八～一九一九年）が在勤していた。坂田は現在の島根県仁田町の出身であり、同じ奥出雲出身の和訓に坂田が大いに力になったことは想像に堅くない。坂田を通じて和訓は末松謙澄子爵、横浜正金銀行ロンドン支店長異孝之丞を紹介され、彼らは折りに触れて和訓の留学資金を援助^{(*)6}している。和訓は、私塾に通う早い時期からR Aへの入学をめざしていた。到着して半年程すぎた一九〇四年七月二一日付の手紙には、「明年六月はロイヤルアカデミーと中学校へ入学致す考えであります（略）このロイヤルアカデミーの学校を卒業の後ハ、英国にてハ立派に暮らされる位の学校で日本人で誰れも卒業をしたものハありません」(文ママ)とあり、その意欲を示している。このロイヤルアカデミー(ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ)と

は、一七六八年に設立されたイギリスでもっとも古い美術学校で、初代校長はジョシユア・レイノルズ。ロンドン中心地に現在まで続く名門美術大学である。一九〇五年一月二四日、和訓はR Aの絵画科へ入学を果たす。当時エドワード・ジョン・ポインターが校長を勤めていた。入学登録簿にある和訓の記載は、学生番号四八三九、年齢は二六・七歳(実際には二八歳)、住所は日本領事館気付で、一九〇五年一月二四日に入学、一九〇八年一月二八日には研究科(Second Term)にすすみ、一九一〇年一月二五日に修了とあり、丸五年間R Aで学んでいることが確認できる。

また和訓が入学した年のR Aの年報には、「新設された外国人学生のための入学試験免除制度のもと、日本人学生が規定作品にはよらずにその作品の優秀さゆえに見習生として入学許可が与えられた」という記述^{(*)7}がある。当時のR Aの入学は毎年一月と七月に行われており、絵画科、彫刻科、建築科の三科の入学者の名前が記されている。一回の入学者は一三～四人で、多い時でも二〇人を越えないう。イギリス全土からの入学希望者があるため、競争率の高い試験であったことがわかる。この年の入学登録簿に記された和訓と同じ一月入学の学生は、絵画科七名、建築科五名、彫刻科一名の合計十三名である。この年の全入学名簿を見ても和訓以外に日本人名はみあたらないため、この見習生が和訓とみて間違いなのであろう。明治期に外国の官立の美術学校へ正式入学した日本人の例は少ない。植民地の多かったイギリスが外国人学生の入学を早くから認めるのは自然な動きであったとしても、その年に制度がたまたま新設されたのか、あるいは日本人である和訓を入学させるためにシステムを

作ったのか、その事情がわかる資料はない。いずれにせよ和訓の入学はイレギュラーなことであった。また、入学記録をさかのぼって調査したが和訓以前に、他の日本人入学者も見あたらないため、和訓がR A絵画科初の日本人留学生であることも確認できた。和訓は、前述の手紙にR A卒業の後、一、二年フランスの大学へ行き、その後、ヨーロッパを周遊して帰国したいと抱負を述べている。その抱負のとおり、R Aへの入学によって、前途は洋々としていた。

R A時代

R Aで和訓は裸婦や石膏、美術解剖学、木炭デッサンのトレーニングを受け、花や静物を学び、上達すると古典やモデルを描くなど、アカデミックな絵画の基礎トレーニングをつむ。このころの作品が、《美人読詩》であることから、入学後一年足らずですでに油彩画のテクニクを身につけた事がわかる。そして早い段階で肖像画家を目指したようだ。和訓は、しばしばJ・Sサージエントに師事していたと伝えられているが、それは小伝に石橋とサージエントとの出会いが書かれているためであろう。ジョン・シンガー・サージエント (John Singer Sargent 一八五六一―一九二五) はアメリカ人医師の息子としてフィレンツェに生まれ、フィレンツェ美術アカデミーで学んだ後、パリでカロリス・デュランに学ぶ。一八八五年にロンドンに居を定め、一八九四年R A準会員、一八九七年正会員となった。小伝によると、和訓はR A入学以前に末松謙澄からサージエントに紹介され、その後本格的な油彩画の手ほどきを受けたとある。当時人気絶頂の肖像画家サージエントは多忙を極め、R A入学以前

の和訓に対してそうした手ほどきができなかったかどうか、具体的な証拠は今のところ発見されていない。しかし、R Aの年報によると、サージエントは和訓が在学した一九〇五―一九一〇年の間に一九〇九年を除いて毎年客員教授としてR Aの絵画科を訪れて指導している。そのため、和訓がR A入学後に指導を受けた可能性は高い。イギリスの美術雑誌 [ALLIES IN ART] 一九一七年には、和訓の作品三点が掲載されている。内一点は日本画風の水彩画、残り二点が読書する婦人図と異孝之丞夫人の肖像画(図3・焼失)である。この二点について、和訓の作品が非常にフランス風で、サージエント的であることが指摘され、和訓がサージエントになろうとしていると、やや揶揄された調子で掲載されている。林みちこ氏もR Aが職業画家を育てる機関であり、和訓にとつてその手本がサージエントである可能性について指摘している^{(*)9}。現実的な問題として実家に財力のない和訓にとつては、絵で身を立てること何よりも優先されたことだろう。R A在学中の代表作《美人読詩》は、ビクトリア朝の面影を残す黒衣の優雅な女性像だが、明るい肌の表現や、着衣の荒いタッチなどにサージエントの影響がみられる。ロンドンから第一回、三回の文展に出品し、二度とも三等賞を受賞した和訓の肖像画は、日本では伝統的なイギリスの肖像画とうつつたようだが、イギリスではむしろフランス的であると評されていた^{(*)10}。肖像画家サージエントの人気もそうしたフラン



(図3) 異孝之丞夫人の肖像(焼失)
1908年以降

ス的な華やかさにあり、和訓もそうしたフランス的な傾向をサージェントから学び取りながら肖像画家としての腕を磨いていったのである。

イギリス画壇への挑戦

出品記録の検証

和訓は、R A在学中から盛んにイギリス国内の公募展への出品を続けている。主だった出品記録を調査すると、一九〇八年から一九二三年の一七一年間に次の八団体に、のべ六一点の出品記録が見つかった。

Dudley Gallery and New Dudley Gallery (Old Dudley Gallery Art Society) (団体は現存せず。和訓は1907~1908年に会員として名前が登録)	3点
International Society (現存せず)	3点
Walker Art Gallery Liverpool (1908~1923年の間出品)	14点
Royal Society of Portrait Painters (1916~1923年の間出品)	10点
Royal Academy Summer Exhibitio (1908~1927年の間出品)	15点
Royal Institute of Painters in Water colours (1911~1918年の間出品)	7点
Royal Institute of Oil Painters (1917~1922年の間出品。会員登録は1927年まで)	8点
The Royal Glasgow Institute of the Fine Arts (1915年に出品)	1点
※この間、日本の文展・帝展へは、1908~1927年の間に25点出品。	

通算一九年のイギリス滞在で、出品作品の重複があるとはいえず、出品期間の一七年の間に六一点の点数は少ない数字ではない。ここでは入選している点数のみ上げているから、入選しなかった応募作品を含めれば、もっと多くの数字が出るであろう。これまで実見できる作品が少ないため、寡作な印象を受ける和訓であるが、公募展への応募を旺盛に行った多作な作家であったことがうかがえる(出品リストの詳細は巻末に記す)。最も出品点数が多いのがロンドンで行われていたR Aの夏の展覧会 (Summer Exhibition) で一五点。一七六九年からはじまったこの展覧会は、旧態依然としていたとはいえ、当時ロンドンで最も規模が大きく、名誉あるとされた展覧会であった。現在でも、毎年五〇〇〇人の作家から一万点を越える応募があり、ロンドンの夏の展覧会として定着している。R Aの生徒や会員でなくても出品することが可能であるため、一八七六年に百武謙行が、日本人初の入選をしている例もみられる。R Aの学生であった和訓がこの展覧会へ多く出品しているのは当然のことだろう。同じく一八九一年から開かれていた王立肖像画協会 (Royal Society of Portrait Painters) への一〇点の出品も肖像画家として身を立てようとしていた和訓として不思議ではない。注目すべきはリバプールのウォーカー・アート・ギャラリーの秋の展覧会 (以下ウォーカー) に一四点出品という数字である。初出品はR Aの夏の展覧会と同じ一九〇八年で、点数もR Aとほぼ同数の出品点数である。他の地方都市ではスコットランドのグラスゴーに出品記録があるが、わずか一点である。これは、和訓にとってウォーカーの秋の展覧会が、R Aの夏の展覧会と同等の意味を持つことを示すものだろう。加えて

和訓がリバプール近郊の顧客を獲得した様子がかがえる。こうした展覧会は上流社会の社交場であり、展覧会を見に訪れた人々は、ここで気に入った作品を購入、あるいは画家へ制作を依頼する。入選した画家にとっては経済的基盤を得るチャンスであった。和訓は顧客獲得のために、熱心に地方都市へのセールスとして、ウォーカーへ出品を続けたのではないだろうか。事実、ウォーカーの出品記録からは、モデルにポールト家などの名前がみられ、地方の名家の肖像画を描くチャンスを得たことがわかる。現在、ロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージック（以下RCM）が所蔵している《エードリアン・ポールトの肖像》（一九二三年、額寸で四八×三六インチ）はその一つである。エードリアン・ポールト（Sir Adrian Celtic Boulton 一八八九―一九八三年）は指揮者で、BBC交響楽団の初代主席指揮者だった人物。RCMで後進も育てていた。RCMがこの肖像画を購入したのは一九七八年。所蔵のいきさつを調査すると、エードリアン・ポールトの父、セドリック・ポールトがRAの展覧会（おそらく一九一〇年頃で、日英博でも和訓作品を見ている可能性がある）で和訓の作品を見て気に入り、家族全員の肖像画を依頼したことに始まる。和訓は依頼を受けてポールト家の住むリバプール（ポールトの生地はリバプール近郊のチェスターなので、あるいはチェスターか）へ赴き、家族四人（エードリアンの父、母、妹と本人）の肖像画を描く。ウォーカーおよび王立肖像画協会の記録にはそのときの作品と思われるポールト家の肖像が一九一一年から出品されている。描かれた肖像画は父からエードリアンに引き継がれ、エードリアン夫妻が引越しをする際にその肖像画を親類へ預

けた。この親類が骨董商に肖像画の売却を委託する。この骨董商から、RCMに打診があり、RCMからエードリアンに連絡がいった。この売却について心外に思ったエードリアンは、一九七八年、自ら父親の肖像画を買戻し、自分の肖像画については夫人がその購入費の一部を負担してRCM所蔵となったという^(*)ことであり、和訓が、RAの展覧会で顧客を獲得したことを裏付けるエピソードとなっている^(*)。

さて、旺盛に出品を続けた和訓だが、調査した出品リストの内容を詳細に見ていくと、油彩画、日本画（水彩画）が混在してみられ、主題は油彩の肖像画、日本画での風景画（和訓の油彩の風景画は極めて少ない）で占められ、特に日本画は和訓得意の鳥や魚のタイトルが多くみられる。出品はパリや日本へもおよんでおり、日本へは一九〇八年の第二回文展から出品を始めている。出品した肖像画のモデルは当時の日本の名士が名前を連ね、大隈重信、後藤新平、東郷平八郎など日本人大物政治家、軍人、松方幸次郎等の経済人も含んだ。松方幸次郎といえば、国立西洋美術館の松方コレクションを収集した人物だが、和訓はそのコレクション形成にかかわっていると小伝が伝えている。実際に、日本へ帰国中の和訓へ宛てた妻からの手紙には、和訓が松方へ推薦したイギリス作家の作品が松方の意にそわなかった等のいきさつが記してあり^(*)、また、和訓は帰国後、松方の共楽美術館構想について黒田清輝とともに話し合う場に呼ばれていること^(*)から、多少の関係はあったとみてよいだろう。その他の肖像画のモデルには華族、外交官、金融・商社、留学生など当時の在英日本人がみられ、和訓と日本の上流階級の間関係はここで

築かれていった。このときのコネクションは帰国した後、日本で肖像画家として活躍するときに和訓の力になったことはいうまでもない。出品の仕方でも日本人の目につきやすいロンドンのRAの夏の展覧会には日本人を、リパブルへはその土地の名士の肖像を出品するなど出品先によって変えており、肖像画家としての自分を懸命にアピールしている様子がうかがえる。

結婚

このように、和訓がイギリス国内の出品に熱心だったのにはRAの学生としての行動というだけでなく、家庭を持ったことに起因するだろう。和訓は一九〇九年頃結婚し、翌年長男が生まれている。妻はイギリス人女性で、ルイスといい、二人の男子をもうけた(図4)。一九〇九年頃というのは推測で、イギリス側に正式な結婚記録が見あたらないためだ。これはおそらく当時の国際結婚の制度がきちんと確立されていなかったため^{(*)14}、和訓は帰国後に一度妻子をともなうて実家へ帰省した際、日本で入籍届けを出している。それによると、ルイスの父は、アイザック・アルフレッド・リード、母がエリザベンソン・リード、明治一八年一二月一四日生まれて長女となっている。婚姻の届け出は、大正一五年三月二三日で、ルイスは同日に日本国籍を取得し入籍している。

和訓はルイスとの結婚



(図4) 渋谷のアトリエの前で、家族写真(左から長男法一、和訓、1人おいて妻ルイス、次男賢二) 1926年頃か

により、RAを卒業した後、ヨーロッパを遊学して帰国する当初の計画の変更をせざるをえなくなった。当面一家の主として、イギリスで暮らしていかなくてはならなくなり、そのためには公募展に出品して名を高め、画家として収入を得ていかなくてはならなかったのである。

イギリスでの交友関係

和訓は出品作品を制作するだけでなく、様々な交友を結び、民間レベルで日英交流を促進している。日本からの留学生の面倒もよく見て、武内鶴之助(一九〇九〜一九一三年に在英)、栗原忠二(一九一二〜一九二四年に在英)、高木背水(一九一〇〜一九一二年に在英)に自分の人脈を紹介している。一九〇七年六月には、ロンドンにきた高村光太郎の下宿の世話をするなど、面倒見の良さもうかがえ、山田敦雄氏も和訓が後から来た日本人画家たちのナビゲーター役を果たしていたと述べている^{(*)15}。ここでは、イギリス側で和訓と交流をもち日英交流に関係した主だった人間関係をあげ、和訓のイギリスでの活躍を浮かびあがらせたい。

アーサー・モリソン

アーサー・モリソンは、(Arthur Morrison 一八六三〜一九四五)は小説家であり、日本美術愛好家であった。特に後年日本美術の研究に没頭し、一九一一年『日本の画家』(The Painters of Japan)を著述。この資料は以降半世紀にわたり、ヨーロッパで日本美術研究に於ける必須の文献となる。モリソンが収集した日本の美術品は大

英博物館に収められ、同館の日本美術コレクションの基礎となっている。そのモリソン・コレクションの中に和訓の作品も含まれていた。大英博物館で所蔵されている和訓の作品五点は、そのすべてが旧アーサー・モリソンのコレクションで、一九一三年、一九四六年の二回にわけてモリソン家より大英博物館のコレクションに収まっている。アーサー・モリソンは前述の『日本の画家』の序文に、日本美術研究の協力者の一人として和訓への謝辞を載せている。また、文中、南画の項で、南画家としての和訓をとりあげ、滝和亭の弟子として紹介している。モリソンはロンドン留学中の下村観山の世話をした事でも知られる人物であるが、大英博物館に残されたモリソンあての和訓の手紙（一九〇六年頃）を見てみると、「大変見事なスモンド先生の絵を送っていただきありがとうございます（略）さてお約束いたしました文晁先生の写生、文一の模写、椿山先生のらくがき、和亭先生の写生と草紙をお送りいたしますので、御受納いただきたく思います。最も無落款のもので、他日お会いして詳しくお話をしたいと思います。一月二三日石橋和訓 印」とあり、和訓はモリソンに日本の古美術品を紹介していることがわかる。その逆にモリソンからスモンドなる人物の絵画を送られている。スモンドが何者かは不明だが、油彩画の手本となるよう送られたものようだ。モリソンが所蔵していた和訓の作品には、日本画作品に「雅原」という画号を記しており、これは和訓が留学前から留学直後によくつかっている号であることから、日本美術を通して、二人は早くからかなり親しい間柄だったと見られる^{(*)18}。

フランク・ブラングイン

(Sir. Frank A. Brangwyn 一八六七-一九五六)

日本では松方コレクションや、松方の共楽美術館構想にかかわった画家として知られているが、松方とブラングインを引き合わせたのが和訓だという説もある^{(*)19}。ブラングインは一九〇四年にRAの会員に推挙されているので、翌年RAに入學した日本人留學生の和訓を知ったと考えるのが妥当であろう。二人の関係で確認出来るのは、一九〇九年に渡英してきた武内鶴之助を和訓がブラングインに紹介したところから、すでにこの時には知り合っていたことがわかる。和訓は、他にイギリスに留學してきた栗原忠二にも、ブラングインを紹介し、武内、栗原の二人はブラングインに師事し、その影響を受けている。また、和訓の妻ルイスが日本にいる和訓へ宛てた手紙にも、ブラングインの消息はしばしば登場しているため、家族ぐるみで長いつきあいがあったことがわかっている。

フランク・アーネスト・ベレスフォード

(Frank Ernest Baresford 一八八一-一九六七)

画家。ダービーに生まれる。RAに学ぶ。在学中の一九〇五年に和訓と出会い、親交を深める中、日本への旅行を決意したといわれる。和訓とはかなり親しかったようで、一九〇五年四月二八日の日付で二人仲良く一緒に写った写真などが残されている^{(*)20}。また、和訓はベレスフォードが日本へ旅立つ一九〇八年三月七日、駅へ見送りに行っていることがベレスフォードの日記に書かれている^{(*)21}。

ベレスフォードの和訓への評価は、その日記に「記憶から対象を

描くことのできる優れた技術を持った画家⁴であると書かれているが、記憶から対象を描くとは恐らく石橋の日本画の技術を誉めたものである。一方で日本人である和訓が、日本人らしさを失い、西洋の追随であるかのような絵面を生み出していることには苦言を呈している²²。しかし、ベレスフォードのこの苦言は和訓のみならず、日本人洋画家全体に常につきまとった問題であった。

その後ベレスフォードは一九〇八年四月二四日に日本へ訪れ、日本では明治四一年《中條精一郎の肖像画》(個人蔵)、《静物》が第二回文展に入選している。特に中條の肖像画は三等賞を受賞した。ベレスフォードは和訓を通じて、和訓と同じ随員としてイギリスへやってきていた中條と親しくなった。ロンドンには、当時の交流を示す証としてベレスフォードが描いた中條精一郎の義理の娘サキエの肖像(一九二九年作)、三浦環の肖像(一九一五年作)が残されている。ベレスフォードはジャパン・ソサエティーの会員でもあり、終生親日派の画家だった。

レナード・スタンフォード・メリフィールド

(Leonard Stamford Merrifield 一八八〇〜一九四三)

東京国立近代美術館所蔵で和訓が制作した肖像画《彫刻家》(図5)のモデルでもあるメリフィールドは、RAの彫刻科の学生であった。一九〇四年のRAの年報には、メリフィールドが三〇ポンドの賞金を得た事が記されていることから、優秀な学生であったことが推測される。

メリフィールドのRAの出品リストに記載された住所では、少な

くとも一九〇六〜一九一一年にスタンフォード・ブリッジ・スタジオを使用している。和訓は一九〇八〜一九一〇年まで同住所から出品しているため、和訓と三年間同じアトリエにいたことがわかる。同じRAの学生として共に研鑽を積んだ仲間であり、メリフィールドは和訓との交遊を通じて日本人と親しかったようだ。それをメリフィールドの出品記録が裏付けている。メリフィールドは一九〇六〜一九四三年まで、RAに数多く入選を果たしており、特に一九〇六年には、《ミセス・コイケの胸像》、一九一〇には《S・オザワ氏の胸像》(大澤三之助か)という日本名のモデルの作品を出品している。また、有名な三越のライオンの銅像は、ロンドンのトラファルガー広場にあるネルソン提督像を囲むライオン像を模して作られたものだが、その原型を一九一四年にメリフィールドが作っている²³。《彫刻家》は画面に一九一一年と記されているが、石橋は一九〇八年に、《L. S. Merrifield Esq.》という作品をRAに出品している。制作年に三年の開きがあるが、同一作品の可能性が高い。メリフィールドも和訓を通じて日本と縁の深い作家であった。



(図5)
彫刻家
1911年
東京国立近代美術館蔵

日英博覧会

和訓がRAを修了した年の一九一〇年五月一日から一〇月三十一日までロンドンの西、シエパーズ・ブッシュで日英博覧会が開催された。万国博と違い、二国間による博覧会であったため、日本を紹介する上で、イギリスに、ひいてはヨーロッパに強い印象を与えた博覧会である。博覧会の中で日本の美術展がひらかれ、古美術部門には鳥獣戯画や、北野天神絵巻など、国宝級の作品が数多く海を渡っている。日英博覧会は、日本博覧会だと嘆かれるほど、博覧会全体を見渡すとイギリス側の参加が少なかった事が指摘されているが、美術の分野に限って言うと、これは必ずしもあたらない。少なくとも日英博にあわせたイギリス側の美術展は、出品点数が一三九九点という規模で行われ、イギリスのオールド・マスターや、故エドワード王のコレクションも飾られ、イギリス近現代絵画・彫刻を概観できる構成であった。^{(*)24}日本側の展示は、カタログによると新美術部門だけで二六四点（しかし洋画はそのうち一九点で全体の一〇分の一にも満たない）。古美術部門の出品は、新美術部門より多い約四三〇点であった。合わせて約七〇〇点の作品が展示され、イギリス人を満足させる点数はそろっていたと言えよう。日英双方で二〇〇〇点規模の展覧会が成されたわけであるから、両国における意義は大きい。この日本側の出品作品の中に和訓の《美人読詩》と《姉妹》が含まれている。洋画十九点の内の二点出品は目立ったことだろう。RA在学時代から親日派の人々に少しずつロンドンに和訓の名が知られ始めていたが、日英博への出品は、それを一気に高めてくれた。前述したエードリアン・ポールの父、セドリックポールもRA

の展覧会ではなく、日英博で和訓を見いだした可能性もあろう。

期間中、日英の美術展関係者により深い交流をもたらした重要な会合が会期半ばの八月三日に開かれている。それが日英美術家交歓会である(図6)。この会に集ったメンバーは一六人。日本側は、和訓を含め、博覧会のために渡英した出品協会理事久米桂一郎、博覧会美術部門の鑑査官であり、評議員であり、審査員の正木直彦、同鑑査官、審査員、出品協会顧問の執行弘道、嘱託職員大澤三之助(第三回文展《大澤君の肖像》のモデル)など九人。英国側の出席はアーサー・モリソン、大英博物館の東洋美術研究家ローレンス・ビニヨン、前述のメリフィールド、RAの教官であり和訓と親しかったチャールズ・シムズ、来日経験のある実行委員のアルフレッド・イースト、彫刻家のゴスコウム・ジョン、同じく彫刻家のレイノルズ・ステイブンスの六人。^{(*)25}ここには日英博の公式な委員や、役員でない人物も含まれているが、イギリス側の出席者を見ると、特に日本に興味を持ち、また日本に関係の深い人物で構成されている。この日英双方の人物間を結びつける要となるのが和訓である。あるいは会の発案自体が和訓のものであったとする可能性も考えられるほど、ここには和訓に縁の深いイギリス人が出席している。和訓は日英博の公式な記録にはその名が記されていないが、当時イギリスに来てすでに七年となる彼が、精力的にイギリスと日本の美術関係者の架け橋をしている様子がうかがえる。高木背水によると日本の国宝が展示できるような会場をイギリスの大家や有識者の間をかねまわって用意したのが和訓であり、当時留学最古参者であった彼が日本人の中で花形であったと伝えている。^{(*)26}

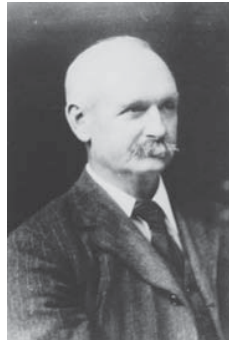
日英博覧会は、結果としてイギリスに日本美術コレクターの拡大を促した。それは、従来のジャポニズムの影響で富裕層が浮世絵などの古美術を求めるといふことにかぎらず、同時代の日本人の作品を求めるといふことにまで発展した。しかも庶民的な層が興味を持ち、気軽に手に入れられるようになったのである。このことは和訓にとって、いや、和訓以外の在英日本人画家たちにとって追い風をもたらしたと同時に、安易な流行に流される作家も生みだしている。



(図6)
日英美術家交誼会
後列左端が和訓

最大のパトロン、レナード・ヒルと石橋和訓

第六回文展にはレオナード・ヒルという外国人による《習作》という作品が出品されている。現在確認できる白黒図版で、七面鳥を描いたことがわかるこの作品を描いた人物について、これまでその詳細が知られていなかった。レオナード・ヒルの読み方は誤りで、英語読みのレナード・ヒルが正しい。レナード・ヒルは、和訓をはじめ、イギリス留学をした日本人洋画家、栗原忠二、武内鶴之助、高木背水などに重要なサポートをした人物である。



(図7)
レナード・ヒル

サー・レナード・アースキン・ヒル (Sir Leonard Eyskine

三三 一八六六年〜一九五二年三月三〇日) (図7) は、一八六六年生まれの生物学者で、最初UCL (ユニヴァーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン) で医学の勉強をし、オックスフォードで生理学の研究をし、のちに同校で教鞭をとる。和訓が出会った頃はロンドン医科大学 (London Hospital Medical College) の教授だった人物で、本職は画家ではなかった。若い頃に一時アーサー・ヒューズに師事していたことがあり、絵はセミプロ級の腕を持っていた。和訓との最初の出会いは不明であるが、ヒルは熱心な日本美術愛好家でもあった。小伝によれば留学資金調達のため、和訓は日本で骨董商的なアルバイトをしていたという記述があり、イギリスでもその経験を生かしていたことは、前述したモリソンとの書簡からも明らかであり、結果ヒルと出会うのは自然な流れだったであろう。林みちこ氏の調査によると、和訓が一九〇六年八月九日付けでヒルにあてた絵入りの手紙が残されているため、ヒルとの親交は和訓のイギリス滞在の早い時期から始まっていることが確認できる。和訓自身はヒルについて、生物学者としてだけでなく、美術家として高い眼識を備えていると紹介している^{(*)29}。ヒルには和訓を通じて多くの日本人が会っている。武内鶴之助、栗原忠二、高木背水らは和訓を通じてヒルの知己を得、彼から絵を学んでいる。また、高木は一九一〇年の日英博覧会の頃、正木直彦も数回ヒルにあつてその人柄に打たれたと伝える^{(*)30}。高木背水は、ヒルの絵を「ポエティックな印象主義^{(*)31}」と伝えているが、ヒルの子孫の家には文展出品と同種の七面鳥の絵や、多くの油彩、水彩画の風景が残されている (図8、9、10)。ヒルと日本との関係は、文展出品だけではなく、一九一三年二月

四日、六日に東京の日本クラブで個展を開催していることがわかっている。ここでは六二点の絵画を展示。作品は、油彩も含むものの、ほとんどが水彩とパステルによる風景であった。作品タイトルは《曇の日》、《夜の色》などがあつたと伝えられる。^{(*)32} ヒルはこのとき来日していないが、帰国した高木背水の尽力によって、この個展は開催された。ヒルの画風を知る手がかりとなる作品を見る限り、師事したアーサー・ヒューズのラファエル前派的な影響は見られず、穏健な印象主義的な傾向の作品を描いたことがわかる。武内や、栗原、高木も古典的な傾向の作品を描く画家ではなく、外光表現を取り入れた画風であることから、ヒルとの相性はよかつたであろう。ただ、和訓の作品に、印象派的な傾向は全く見られない。そのため、絵を描く上で、和訓がヒルに師事したことはないとみてよい。むしろヒルは和訓への経済的な援助や、日本画家としての和訓を後押ししていた。

その、レナード・ヒルと和訓の関係を知る手がかりがロンドン医科大学に残っていた。大学の資料によると、和訓はレナード・ヒルの紹介で、ロンドン医科大学で日本画のデモンストレーションを行い、肖像画や、食堂を飾る壁画制作の依頼を受けていた事がわかる。^{(*)33} どちらの作品も所在は不明だが、食堂の壁画については、小伝に「同大学の食堂新築せらるるや画伯に依頼して食堂の壁画を画かしむ。其額面は高さ九尺長さ一五〇尺にして筆を正月の場面に起し、春の花鳥、夏の納涼、秋の紅葉、冬の雪景に至る四季の風光を日本風俗に写したるものにして」とあり、大学の機関誌ロンドン・ホスピタル・ガゼットにも「テーブルの何処に座つても異なつた季節が

楽しめる。絵画はワニス塗りが施されていないが、色が落ちること無く、洗うことも可能^{(*)34}。食堂はすばらしい東洋の趣を呈し、(略) 大学理事会の寛大なる援助のおかげで食堂の壁は日本絵画のパネルで飾られ^{(*)35} 等と、四季の風景を日本画風に描いた作品で、油彩で描かれたことをうかがわせる。このことを裏付ける写真が(図11)である。当時食堂で行われた晩餐会の写真であるが、背後を飾っているのが和訓の作品であり、ちょうど冬と春の部分がかいま見える。写真に写っていない部屋の反対側の部分に夏と秋の絵があつたことだろう。

ヒルの和訓への援助はこれだけではなく、ウインチェスター教会を崩落の危機から救つた英雄ウィリアム・ロバート・ウォーカーの肖像(ウインチェスター教会 六一・一×五〇・八cm)にも和訓を推薦したふしが見られ、^{(*)36} 妻子の肖像も依頼している。それが筆者が発見した一九一五年の《レディ・ジャネット・ヒルの肖像》(図12)とその娘マーガレットの肖像(図13)である。



(図8) レナード・ヒルの作品(油彩) 右下に落款のようなマークを入れている



(図9) レナード・ヒルの作品(油彩)



(図10)
レナード・ヒルの作品 (油彩)



(図11)
ロンドン医科大の食堂の晩餐会
背景の壁に和訓の作品

レディ・ジャネット・ヒルの肖像

現在、ヒルの子孫が所蔵しているこの作品は、一九一五年の作品で大きさは七五×六二センチ。ヒルの妻ジャネットを描いた作品である。所蔵者の話では、病気になった和訓にヒルは経済的な援助をし、回復した後、お金を返すことのできなかつた和訓に返済ではなく、かわりに妻の肖像を描くよう依頼したものであるという。現存する和訓の肖像画のほとんどは日本人男性を描いたものであり、図版で確認できる女性像も所蔵先が不明のものが多い。その中でこのジャネットと、その娘マーガレットの肖像は女性像として貴重だ。特にジャネットの肖像は、黒いドレスに身を包み、いかにもビクトリア朝の気風を残す、気高いイギリス女性を描いたもので、《美人読詩》よりも幾分柔らかい筆致で描かれ、和訓の円熟した筆を物語る作品である。マーガレットの肖像画の方は同時期にヒルが依頼したものは不明で修復が必要な状態だが、おそらく一九一五〜二三年に描かれたもので、未完な印象がある。作品と全く同じポーズの写真が残されており、写真から起こされた肖像画であることがわかった(図14)。和訓はおそらく一九一八年の最初の帰国前後から日本(*)の名士の肖像を、写真からおこす依頼を受けるようになっていた。(*)写真から起こされた肖像画は奥行きがどうしても浅くなるが、少なくともジャネットの肖像は、そうした奥行き(*)の浅さや、違和感がないため、モデルを前にして描かれたとみてよい。マーガレットの方は未完成ながら、やはり写真から起こした奥行き(*)の甘さが見て取れる。一九二三年のマーガレットの結婚式の芳名録には、和訓と妻ルイスの名前が記載されている。肖像画もほぼ同じ頃に描かれた可能

性があり、あるいは結婚祝いのつもりで制作したのかもしれない。いずれにしても、こうした女性像の作品発見が和訓の評価を再考するのに役立つことはまちがいない、より多くの作品の発見が待たれる。

(図14)



マーガレットの肖像



マーガレットの肖像写真

イギリスで和訓が得た社会的地位

チエルシー・アーツ・クラブと欧州大家絵画展覧会

一九一八年二月、和訓は渡英後初めて帰国する。和訓はイギリスにいた一九九年の間に二度帰国しているが、この最初の帰朝の目的の一つは、欧州大家絵画展覧会（一九一八年六月 日本橋三越呉服店）を行う事だった。この展覧会は、当時ドイツに攻め込まれ、イギリスへ逃れてきたベルギーの画家たちの窮状を救うためのチャリティー展覧会だった。この展覧会については一〇四点出品されたフランク・ブランクインの銅版画を中心とした佐藤みちこ氏の論文があるが、当時の和訓の背景について補足したい。当時ロンドンでは芸術家に限らず、戦火に巻き込まれたベルギー人の援助を行おうという機運が大きく高まっていた時期であった。一九一五年にはロイヤル・アカデミーで War Relief Exhibition が行われ、その展覧会にベルギー

の作家の作品を飾るベルギー・セクションが設けられ、その売り上げをベルギー人作家に寄付しているなどの動きがあった。³⁹

もう一つの動きがチエルシー・アーツ・クラブである。チエルシー・アーツ・クラブについてはトム・クロス氏の調査に詳しいが、ここにその概略を紹介する。このクラブは、ホイットスラーを中心としたチエルシーに住む芸術家たちによって一八九〇年に設立された。この団体はロンドンの美術界において重要な美術団体で、現在も活動している。クラブはロンドンの才能ある画家たちが非公式に集う場所でもあり、ほとんどがR Aの会員や、ニュー・イングリッシュ・アート・クラブの会員で構成されていたが、他の美術団体のメンバーも含まれている。いわば芸術家による紳士クラブで、このメンバーになるということは、非常に名誉なことであった。八代目の会長だった、ジョン・ラバリーと、ウィリアム・ド・グレンはチエルシー・アーツ・クラブのメンバーに亡命ベルギー人画家を迎え、彼らを援助している。欧州大家絵画展覧会の開催当時、和訓はチエルシー・アーツ・クラブのメンバーではなかったが、住所はチエルシー地区にあった。彼が行った展覧会の内容や目的がこうしたチエルシー・アーツ・クラブの動きと類似している。

この展覧会の後、和訓は、日本で在日ベルギー大使からの感謝状を受け取り、一九二〇年三月再渡英し、翌年の一九二一年二月七日にチエルシー・アーツ・クラブの会員として迎えられている。その経緯をみると、一九二〇年の一月一八日に、オーストラリア出身の肖像画家で、ロンドン在住のジェイムズ・クイン、R A会員のアルジャーノン・タルメージによって和訓は会員に推挙されている。

他にもスコットランドの画家で、王立肖像画協会のアレクサンダー・ジャミエソン、W・S・ウェブスター、E・P・ホッグが推薦者に名を連ねている。R A 会員で風景画家のフィリップ・コナードも会員の推挙に協力した。和訓はクラブに一九二五年まで会員として登録されている^{*4}。和訓の会員推挙には、日英間の美術交流における彼の長年の業績が認められ、かつ日本で行った欧州大家絵画展覧会の開催への尽力も当然考慮に入れられただろう。和訓が会員になった当時、クラブは第一次大戦後の改装をおこない、会員も美術界の重鎮や多くの画家が集っていた。一九二〇年の会長であるジョン・ラバリーは、アイルランドの印象派の画家であり、最も社会的に成功した肖像画家であった。他にもアルフレッド・ジェームス・ムンクス、動物画を得意としたオーガスタス・ジョン、イギリスの印象派フィリップ・ウィルソン・ステイル、王立肖像画協会の会長で、後のクラブの会長となるサー・ウィリアム・オッペンなど、イギリス画壇のそうそうたる顔ぶれが並ぶ。この会員に加わった時がイギリスに渡った和訓が最も成功と名誉を手にした瞬間であった。

結びにかえて

和訓はR A 在学中の一九〇六年に早くも王立水彩画協会 (Royal Watercolor Society) の会員になっている。水彩画協会と聞いて、ターナーのようなイギリスの水彩画を想像してしまうが、イギリスで発見された和訓の水彩画や、出品リストのタイトルを確認する限り、日本画もしくは日本画風の水彩作品を制作し、水彩画協会に出品していることがわかる。水溶性の絵の具で描く日本画は、イギリ

スで水彩画の範疇とうつつたようだ。会員になったスピードの早さは、R A の学生といっても日本画家としては一人前とみなされていた事を示す。魚、花鳥等のモチーフを絹本や紙に描いたオリエンタルな雰囲気のような作品は、イギリス人に好評を得、注文も多くあった。前述したベレスフォードの苦言は、ベレスフォードだけでなく、他のイギリス人画家が日本人洋画家に対して抱くものであったが、それに対する一つの回答がこうした作品であったのだろう。大英博物館の旧モリソン・コレクションの中にある和訓作品五点も、すべて日本画である。肖像画家としての和訓への注文の中心は、出品記録からも伺えるように、在英の日本人上流階級からだった。イギリス社会からの注文は、日本画の注文が中心であったことが調査から浮かび上がる。当時のイギリスが日英同盟のよき時代であり、先に述べた日英博覧会の影響など、インテリ層のみならず広く一般にまで日本ブームが起こっていたことを考えると、日本人であり、日本画が描ける和訓に、わざわざ油彩画で肖像を頼むよりも、彼らのオリエンタル趣味を満足させる日本画を求めるイギリス人の方が圧倒的に多かったのである。出品記録の日本画と洋画の混在は、そうしたニーズに応えた結果だった。また、和訓自身も、家族を抱えながら、生活のため日本画を量産していかなければならなかった。当然和訓としては、イギリス社会からも肖像画家として認められたかったであろう。しかし現実には彼の希望とは裏腹であった。しかし、イギリスで和訓が描いた日本画は純然たる日本画とは言いがたい。和洋折衷した表現で、こうした日本画とも水彩画ともおぼつかない作品は、どうしてもヨコハマ絵的な奇妙さと底の浅さがみえてしま

う。東洋と西洋が融合し絵画として一つの完成された様式を確立するまでにいたっておらず、一過性の流行にとどまっている。流行に流されず一つのスタイルを確立した画家に藤田嗣治をあげられるが、和訓より一〇歳年下の藤田は和訓と似て非なる人生を歩む。この二人の対比は両極端で興味深い。これについては別の機会に考察したい。

和訓とも仲がよく、同年代にイギリスに渡っていた画家の佐藤武造は、当時タケ・サトーの名で知られ、絹本に日本画の素材と技法で肖像画を描き、そのオリエンタルな雰囲気を持つ肖像画を求めたイギリス人からの注文が相次いだ人気画家となった。もしも和訓が日本画で肖像画を描いていたならば、日本画での肖像の注文が多く寄せられたに違いない。しかし、日本画と洋画を器用に使い分けて世を渡った和訓であるが、日本画で肖像を描く事だけは、終生しなかったのである。

イギリス画壇で確固とした地位を築き、日本の文展に《ものおもい》や《美人読詩》で受賞し、最終的に帝展の審査員までになった和訓だが、彼がイギリスで築き上げた地位は日本では全く通じない、もしくは完全に無視されるものであった。中條精一郎の娘で作家の宮本百合子は小説『二つの庭』の中に和訓をモデルにした人物を登場させている。『砂場嘉訓（筆者注和訓のこと）は日本へ帰ってからはいわゆる画壇というものには余り接近せず、じかに、上流の依頼者へ結びついていった。フランス絵画の影響のつよい日本の洋画の若い世代には、アカデミックな嘉訓が日本に帰ろうと帰るまいと無頓着らしかった」と、和訓の状況を描いている。^(*)

大正期に日本で開花した個性の尊重や独創的な作品の創出、伝統の踏襲ではない新たな創造性に高い価値を見いだしていた当時の日本の画壇の中で、肖像画家としての和訓は完全に時代遅れとなり、その存在を主張することができなかった。和訓は、宮本百合子が記したように、次第に画壇と距離をとり、直接肖像画の顧客の注文に応えていく道をとる。そして彼の目指した日本画と洋画の融合した新しい日本画の創出という理想も、急逝により果たせぬままその生涯を閉じた。享年五一歳であった。

〈補足〉

その後イギリスに残された和訓の家族だが、当時の国際結婚について詳しい小山騰氏の指摘によれば、当時英国夫人は日本人と結婚して日本国籍を取得しても、英国籍を持ったままであることがままあった。それはイギリス政府による保護を受けるための処置であったようだが、ルイスの場合も一時的に日本国籍を取得したものの和訓の死亡により、日本国籍から抜けイギリス人としてロンドンにそのまま暮らした。ルイスの死亡証明書によると一九六〇年六月九日に死亡、画家石橋和訓未亡人と記されている。再婚の記録はない。死亡時に身寄りがなかったため、役場が遺体を葬ったとある。二人の息子は第二次世界大戦中に来日、長男は家庭を持っていたが、一家で中国へ渡り行方不明。次男は終戦の年に東京で亡くなっている。ルイスは役場にも埋葬場所の記載がなく、墓は不明。ルイスの元に残されていたと考えられる和訓ゆかりの品々も、遺産を引き継ぐものが無く、そのまま処分されてしまったと考えられる。

- 註*
- 1 林みちこ『石橋和訓研究 明治洋画における肖像画の諸問題を中心に』一九九一年
- 2 石橋の生地佐田町教育委員会の依頼を受けたロンドン在住のトム・クロス氏の調査報告書がある。[KAZUNORI ISHIBASHI (1879~1928) NOTES ON THE PAINTER] Prepared by TOM CROSS 一九九五年
- 3 手塚晃編『幕末明治海外渡航者総覧(第二巻人物情報編)』柏書房一九九二年七二ページ之中條精一郎の記録から
- 4 河邊榮養『石橋和訓画伯小伝』(私家版)
- 5 和訓の実家に残されていた手紙から。ロンドンの消印は一九〇四年五月七日
- * 4 前掲書
- 7 [Annual Report from the Council of the Royal Academy to the General Assembly of Academicians for the year1905]
- 8 [ALLIES IN ART] A COLLECTION OF WORKS IN MODERN ART BY ARTISTS OF THE ALLIED NATIONS ISSUED By 'Colour Magazine' 1917 COLOUR LTD.
- * 1 前掲書
- 10 『高木背水伝』直木友次良編 大肥前社 昭和一二年三月二四日初版発行
- 11 このエピソードはRCMの記録から、オリバー・デイヴィス氏よりご教示いただいた。
- 12 一九一八年六月一〇日付けのルイスから日本の和訓に宛てた
- 13 『黒田清輝日記第四巻』p2304 十一月二十八日の日記 中央公論美術出版
- 14 当時の国際結婚については小山騰著『国際結婚第一号』講談社選書 一九六八年 メチエ刊にくわしい
- 15 碌山と小石川の教会 喜田敬 二〇〇五年
- 16 『武内鶴之助展』カタログ「武内鶴之助 眼にうつる風景」山田敦雄 一九九三年 目黒区立美術館
- 17 現代語訳は岡宏三氏による、現文は次の通り
御見事之スモンド先生之御筆御送与被下難有存候(略) 偕而又御約束之文晁宣先生之写生文一模写椿山先生之らく書、和亭先生の写生草紙御送付申上候間御納被成下度候最も無落款之ものに候へば他日拝顔之上御物語可申上候
- 18 モリソンについては、小山騰氏の論文「アーサー・モリソンと日本」一九九四年に詳しく
- 19 越智裕次二郎「松方コレクションについて」『神戸市制一〇〇周年記念特別展―松方コレクション展』図録、神戸市立博物館一九八八年一一二ページ、藤本光城「松方・金子物語」兵庫新聞社、一九六〇年一八六ページ、Rodney Brangwyn, [Brangwyn William Kimber, London, 1978] p211
- 20 この写真はベレスフォードの遺族のもとに残されており、筆者もイギリスで数点実見した。ベレスフォードについては山

- 梨絵美子「英国人画家フランク・ヘレスフォードと中條精一郎」明治村便り大11号一九九八年、およびジョン・フィネラン氏の次の研究に「くわしい」。*[Derbyshire Artists Series FRANK BERESFORD (1881-1967) Painter of History]* John Fineran 2002
- 21、22 ヘレスフォードの日記より。親族より和訓に関係する部分をご教示いただいた。
- 23 三井広報委員会作成の『三越の歴史 三越のシンボルライオン像について』の記述に英国の彫刻家メリフィールドの名がみられる。一九一四年という時期とメリフィールドの日本との縁の深さから、別のメリフィールドという彫刻家を作ったとは考えにくく。
- 24 日英博覧会の出品点数については *[The Japan British Exhibition, 1910 Fine Arts Catalogue London 1910]* Bomros & Sons Ltd/1910 及び『AN ILLUSTRATED CATALOGUE OF JAPANESE MODERN FINE ARTS DISPLAYED AT THE JAPAN-BRITISH EXHIBITION LONDON 1910 TOKYO SHIMBI SHON』の出品リストによる
- 25 日英美術家交誼会については、美術新報第10巻第4号に塚本靖へのインタビューがのっている。
- 26 * 10 前掲書
The Royal College of Physicians and Oxford Brooks University Medical Sciences Video Archive MSVA 051 Sir Austin Bradford Hill CBE FRS in interview with Max
- 27
- 28 Blythe Ambleside, Cumbria, 26 March 1990 ほか、同種の証言を子孫から得た
- 29 * 1 前掲書
大正七年五月二〇日、日本美術協会の講演に於いて
- 30 * 10 前掲書
- 31 * 10 前掲書
- 32 ロンドン医科大学の機関誌『ロンドン・ホスピタル・ガゼット』(Vol. XX No. 3 1913 二月号)
- 33 ロンドン医科大学で見つけた和訓の資料の調査にはロンドン在住の安藤恭子氏にご協力いただいた。ロンドン・ホスピタル・ガゼット Vol. XVI No. 3 一九〇九年 二月号 p57-58
- 34 ロンドンホスピタルガゼット Vol. XIX No. 5 一九一三年二月号 p132
- 35 ロンドン・ホスピタル・クラブ・ユニオン(クラブ連合)幹事の報告書(一九一二年一九一三年) (p287) (p289)
- 36 肖像画の額縁に制作をした会社名 (Siebe, Gorman & Co.) が記載されているが、これがヒルの関係している会社であることが、ヒルの紳士録からわかった。
- 37 同種の指摘は註1前掲書にもある。
- 38 国立西洋美術館紀要No. 3 「国立西洋美術館寄託フランク・ブランクインの版画一〇四点の由来について」佐藤みち子 一九九九
- 39 *[Art Institutions in the Metropolis : Royal Academy of*

- Arts]
- 40 * 2 前掲書
- 41 [The Chelsea Arts Club Member's Book] (一九一三-一九一〇)
- 42 宮本百合子『一つの庭』一九九四年 新日本出版社 P298

本稿執筆にあたり、美術館連絡協議会、財団法人ポーラ文化振興財団に助成をいただきました。記して感謝申し上げます。また次の方々に多大なご協力をいただきましたこと、ここにお礼申し上げます。

(五十音順 敬称略)

阿部光博、安藤恭子、石飛俊司、石飛裕、石橋彰治、井上悦子、出雲京子、漆原一郎、大沢泰夫、大庭定男、岡宏三、小糠しのぶ、大和田政也、加藤節雄、川村雄次、菅野洋人、栗田玲子、古浦秀明、五木田聡、小谷真理、小山騰、桜井武、佐藤昭夫、佐藤智子、佐藤みちこ、執行一平、修復研究所21、白根敏昭、副島三喜男、巽孝之、津田宏、土屋修一郎、恒松郁夫、田英男、中川信、野口玲一、林洋子、引野道生、平瀬礼太、古川訓子、星野桂三、馬籠久美子、松本武、松平直壽、的野克之、三島和貴、陸奥陽之助、山城千恵子、弓家智恵、横山伊穂子、横山勝彦、吉田ケイティ、吉田卓史、渡辺俊夫、渡部良治、アンジェラ・ボルジャー、アン・ステイード、デイヴィット・ペン、エリザベス・ヒル、ジェイムズ・パーソロミュー、ジョン・フィネラン、ジョン・パーディエーカー、ジョン・スペンス、ケネス・マツコンキー、オリバー・デイヴィス、パトリック・ニール、ポール・マーティン、セバスチャン・ドブソン、ティモシー・

クラーク、ロイ・ヒル、ルパート・フォークナー
また、ここにお名前を記すことのできなかつた方々にも心より感謝申し上げます。

BULLETIN
OF
IWAMI ART MUSEUM

No. 2

2008

IWAMI ART MUSEUM
SHIMANE JAPAN

島根県立石見美術館
研究紀要 第2号

発行日－平成20年3月31日

編集発行－島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷－株式会社タイピック

●石橋和訓 略歴

- 1876 (明治9) 6月6日島根県飯石郡須佐村反辺に生まれる。父石橋熊三郎、母マツ、幼名は倉三郎。
- 1891 (明治24) 飯石郡立掛合村高等小学校卒業。
郡南画展覧会に《高士観瀑図》出品。一等賞となる。
9月 出雲市今市町、永瀬雲山の南画塾に入門。
- 1892 (明治25) 5月松江師範学校画学部担任、後藤玉舟の門に入り、南画修業。
8月松江方円舎で堀櫟山に洋画を習う。
- 1893 (明治26) 11月上京。
東京麻布の千家男爵邸に書生として寄寓。
- 1894 (明治27) 3月東京牛込新小川町、本多錦吉郎に入門。洋画を学ぶ。
11月 松平伯爵、千家男爵の紹介を経て帝室技芸員滝和亭へ入門。
- 1895 (明治28) 9月東京美術協会漢画展覧会に出品。二等賞。
- 1896 (明治29) 8月京都へ下向。知恩院、二尊院の秘宝内覧。今尾景年に師事。
師の和亭を手伝って、岩崎男爵、渋沢栄一依頼の屏風制作。
- 1897 (明治30) 4月松平伯爵令嬢が三井家へ嫁ぐのに際し、屏風一双を依頼され完成。
12月兵役につく。
- 1901 (明治34) 9月 師 瀧和亭死去。須佐村役場へ改名願。倉三郎改め和訓となる。
11月除隊につき帰郷。
- 1903 (明治36) 12月旧米沢藩主上杉憲章、小笠原長幹のロンドン遊学にあたり、中條精一郎、井上匡四郎、三土忠造らと共に随行人としてロンドンに出発。
- 1904 (明治37) 4月 Kensington Painting School 入学。
- 1905 (明治38) 1月24日 ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ (R A) 入学。
- 1906 (明治40) 王立水彩画協会会員となる。
- 1908 (明治41) 1月28日研究院入学。
夏、R A夏の展覧会に初入選。
第2回文展《ものおもい》三等賞。
- 1909 (明治42) 第3回文展《美人読詩》三等賞。《大澤君の肖像》、《姉妹》出品。
レナード・ヒル博士が日本美術についてロンドン医科大学にて講演。席上、和訓が日本画のデモンストレーションを行う。
マリア・ルイス・リードと結婚。
- 1910 (明治43) 1月25日 R A 研究科修了。
2月5日長男法一誕生。
5月日英博に《美人読詩》、《姉妹》出品。
10月 第4回文展《肖像》出品。

- 1911 (明治44) 第5回文展《ドクトル植原氏肖像》。
パリ、ソシエテ・ナショナル・デ・ボザールに初出品。
12月18日 次男賢二誕生。
- 1912 (明治45) ロンドン医科大より150ポンドで食堂の壁画を請け負う。
- 1913 (大正2) 3月ロンドン医科大学の食堂の壁画完成。
3月30日(日) ロンドンの異家(横浜正金銀行ロンドン支店長)、にて小泉信三、京大の狩野博士に会う。(小泉信三の日記より)
10月第6回文展《彫刻家》(東京国立近代美術館所蔵)、《織手消閑》出品。
11月26日《F.J.スミス博士の肖像》完成。ロンドン医科大学にて除幕式。
- 1915 (大正4) レディ・ジャネット・ヒルの肖像を描く。
- 1916 (大正5) 10月第10回文展《肖像》出品。
ギリシア、ローマ、南欧を旅行。
- 1918 (大正7) 2月渡英後初めて帰朝。
3月中央美術3月号に『最近の英国画壇』寄稿。
6月欧州大家絵画展覧会 日本橋三越にて開催。
10月第12回文展《肖像松方侯》(鹿児島市立美術館蔵)、《肖像某氏の家族》文展推薦員にあげられる。
- 1919 (大正8) 10月第1回帝展《肖像山田氏夫婦》、《肖像植原悦二郎氏子供》。
11月松方幸次郎、黒田清輝らと共楽美術館建築構想について話し合う。
- 1920 (大正9) 3月再渡英。
10月第2回帝展《鯉》、《江原素六翁肖像》(麻布学園所蔵)出品。
- 1921 (大正10) 亀井伯爵一家の肖像をフランスのソシエテ・ナショナル・デ・ボザールへ出品。
10月第3回帝展《松平伯爵像》《鮎》。
チェルシー・アーツ・クラブのメンバーとなる。
- 1922 (大正11) ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール準会員となる。
10月第4回帝展《肖像》出品。
- 1923 (大正12) 9月2回目の帰朝。9月1日の関東大震災のため、上京をやめ、松江に帰省。
イギリス人画家、サー・ハーバート・ヒュースタントンと同行する。松江市白潟本町出雲益良宅に寄寓。
渋谷区常盤松280番地20にアトリエ新築。
《避難者の群れ》制作(島根県農林会館所蔵)。
フランス、ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール会員となる。
- 1924 (大正13) 6月 信州安曇野で、絵画講習会。
第5回帝展(委員)《田男爵肖像》、《徳富猪一郎肖像》(東京国立博物館蔵)出品。
聖徳絵画館の壁画として、明治天皇とグラント將軍御引見の図《グラント將軍

- と御対話》の制作を命じられる。奉納者は渋沢栄一（和訓の死去により和訓の絵をもとに1930年大久保作次郎が完成させる。現在明治神宮聖徳記念絵画館蔵。和訓による下絵のみ出光美術館に残されている）。
- 昭和天皇（当時皇太子）ご成婚の際、《ブラジル海峡の光景》を揮毫献納する。
- 1925（大正14） 10月第6回帝展（委員）《スタディ》（島根県立美術館所蔵）、《渋沢子爵肖像》出品。
河辺栄養の肖像制作。
- 1926（大正15） 1月7日～13日 個展開催 石橋和訓日本画展 東京三越呉服店。（日本美術年鑑1927年版）
10月第7回帝展（委員、審査員）《肖像徳川家達公》、《肖像若槻首相》出店。
妻子同伴で島根県の実家へ帰郷。入籍手続きをする。
第1回 聖徳太子奉賛展《東郷平八郎元帥像》。
- 1927（昭和2） 10月第8回帝展（委員審査員）《肖像岸博士》《某氏の家族》出品。
- 1928（昭和3） 5月3日下渋谷区赤十字病院で死去。

石橋和訓出品記録

ID	出品先	出品年	カタログ ナンバー	作品タイトル	プライス(£)	出品時の住所	備考
1	Royal Institute of Painters in Water Colours	1911	36	Kingfisher	7.7.0		
2	Royal Institute of Painters in Water Colours	1911	144	Snow Herons-Autumn time	12.12.0		
3	Royal Institute of Painters in Water Colours	1912	209	The Spirit of the Lake	15.15.0		
4	Royal Institute of Painters in Water Colours	1912	478	Cherry Blossom (rain effect)	7.7.0		
5	Royal Institute of Painters in Water Colours	1914	255	Winter	5.5.0		
6	Royal Institute of Painters in Water Colours	1915	136	Japanese Plum Blossom Whinter Time	8.8.0		
7	Royal Institute of Painters in Water Colours	1915	351	Wren	5.5.0		
8	Royal Institute of Painters in Water Colours	1918	172	Grouse	10.10.0		
9	Royal Institute of Oil Painters	1917	248	The Hon. Kojiro Matsukata, President of Kwasaki Zosen			松方幸次郎
10	Royal Institute of Oil Painters	1920	123	Needlework			
11	Royal Institute of Oil Painters	1920	154	View from Walberswick Ferry, Southwold			
12	Royal Institute of Oil Painters	1920	264	Captain T. Sekine			
13	Royal Institute of Oil Painters	1921	317	Prof. Seichi Taki			瀧精一
14	Royal Institute of Oil Painters	1921	372	Fujiyama			
15	Royal Institute of Oil Painters	1922	283	Artist's Wife and Sons			
16	Royal Institute of Oil Painters	1922	362	Dr. H. Miura, Prof. of Literature, Kyoto University			三浦環の夫、 医学博士三浦政太郎か
17	Royal Society of Portrait Painters	1916 (26th)	118	Unokichi Noyawa Esq			
18	Royal Society of Portrait Painters	1917 (27th)	105	Professor Kawazoi			カワゾエの まちがいが
19	Royal Society of Portrait Painters	1917 (27th)	112	Kengo Mori Esq			森賢吾
20	Royal Society of Portrait Painters	1918 (28th)	110	Mrs Kaneo Nanjo			南條金雄
21	Royal Society of Portrait Painters	1920 (30th)	41	Konojo Tatsumi Esq			巽孝之丞
22	Royal Society of Portrait Painters	1920 (30th)	106	Portrait of a lady			
23	Royal Society of Portrait Painters	1921 (31th)	33	Yoshitake Noguchi Esq			
24	Royal Society of Portrait Painters	1921 (31th)	35	Shinroku Nanjo Esq			
25	Royal Society of Portrait Painters	1921 (31th)	134	Study for portrait Group:Congres d'Histoire de l'art, Paris,1921			
26	Royal Society of Portrait Painters	1923 (33th)	56	Dr. Soi Yamamura			
27	Royal Society of Portrait Painters	1923 (33th)	96	Mrs Cedric R. Boulton			
28	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1908 (38th)	1190	Spring		Stanford Bridge Studios, Fulham Road, London SW	Water colour on Silk
29	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1908 (38th)	1250	The Snowy Heron		Stanford Bridge Studios, Fulham Road, London SW	Water colour on Silk

30	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1910 (40th)	140	Col. Otohiko Higashi MVO		43 Roland gardens, South Kensington, London SW	Oil painting
31	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1910 (40th)	1311	Winter Morning (on silk)		43 Roland gardens, South Kensington, London SW	Water colour on Silk
32	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1911 (41st)	48	Cedrik R. Boulton, Esq, JP		43 Roland gardens, South Kensington, London SW	Oil painting
33	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1911 (41st)	230	Olive, daughter of Cedric R. Boulton, Esq, JP		43 Roland gardens, South Kensington, London SW	Oil painting
34	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1912 (42st)	47	Mrs Egerton Macdona		43 Roland gardens, South Kensington, London SW	Oil painting
35	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1912 (42st)	1181	Starting		43 Roland gardens, South Kensington, London SW	Water colour
36	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1913 (43st)	808	Japonica		7 Fernshaw Road, Fulham Road, London SW	water colour
37	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1914 (44st)	605	Japanese Carp		7 Fernshaw Road, Fulham Road, London SW	Water colour
38	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1914 (44st)	1032	Olive, daughter of Cedric R. Boulton, Esq, JP		7 Fernshaw Road, Fulham Road, London SW	Oil painting
39	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1916 (46st)	1053	Mackerel (purchased for permanent collection)		5 Turner Studios, Glebe Place, Chelsea, London SW	Water colour
40	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1916 (46st)	1208	Ebb Tide-Rhyl, North Wales		5 Turner Studios, Glebe Place, Chelsea, London SW	
41	Autumn Exhibition of Modern Art, Walker Art Gallery, Liverpool.	1923 (53st)	821	Mrs Cedric R.Boulton		11 Doria Road Parson's Green, London SE6	Oil painting
42 ? 44	Old Dudley Gallery Art Society	1911 (41st)	26	Wisteria with Rain Affect ※あと2点の出品があるはずだが、これ以後の展覧会記録なし		43 Roland gardens, South Kensington, London SW	Special Jubilee Exhibition

45	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1908	356	L.S.Merrifield Esq		Stanford Bridge Studios, Fulham Road, London SW	
46	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1910	421	Colonel Otohiko Hiki Higashi, MVO		Stanford Bridge Studios, Fulham Road, London SW	東乙彦 大佐か
47	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1913	1165	Japonica: Winter time		7 Fernshaw Road, Fulham Road, London SW	
48	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1914	1265	Japonica: Carp		7 Fernshaw Road, Fulham Road, London SW	
49	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1915	597	Count Okuma, the Japanese Premier		7 Fernshaw Road, Fulham Road, London SW	早稲田大学蔵
50	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1915	1136	Sea-bream		7 Fernshaw Road, Fulham Road, London SW	
51	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1916	433	Y. Ito Esq		11 Doria Road Parson's Green, London SW	
52	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1917	391	Mrs Kaneo Nanjo		5 Turner Studios, Glebe Place, Chelsea, London SW	南條金雄夫人
53	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1921	331	Count and Countess Jijo Kamei and Family		11 Doria Road Parson's Green, London SW6	亀井温故館蔵
54	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1922	286	Kisaburo Suga Esq, president of the court of Appeal,Tokyo		11 Doria Road Parson's Green, London SW6	
55	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1923	272	Mrs H Suzaki and children (すずきのまちがいか?)		11 Doria Road Parson's Green, London SW6	今岡美術館蔵
56	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1923	409	Adrian C. Boulton Esq		11 Doria Road Parson's Green, London SW6	
57	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1924	233	Viscount Shimpey Gotoh, ex-Foreign Minister		11 Doria Road Parson's Green, London SW6	後藤新平

58	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1925	304	Baron Kenjiro Den, ex-Governor-General of Diawan, Formosa, and ex-Minister		11 Doria Road Parson's Green, London SW6	田健治郎
59	The Summer Exhibitions of the Royal Academy of Arts	1927	163	Adm.Count H.Togo, Admiral of the Imperial Japanese Navy, 1912, late Chief of the Japanese Imperial General Staff		11 Doria Road Parson's Green, London SW	東郷平八郎
60	Inter National Society	0		詳細不明			
61	The Royal Glasgow Institute of the Fine Arts	1915	484	Sea-Bream (Water colour)	16.00	7 Fernshaw Road, London SW	
62	第2回文展	1908		ものおもい			3等賞
63	第3回文展	1909		美人読詩			3等賞 島根県立美術館蔵
64	第3回文展	1909		姉妹			
65	第3回文展	1909		大澤君の肖像			大澤三之助
66	第4回文展	1910		肖像			
67	第5回文展	1911		ドクトル榎原氏肖像			
68	第6回文展	1912		彫刻家			東京国立近代美術館蔵
69	第6回文展	1912		緋手消閑			
70	第10回文展	1916		肖像			
71	第12回文展	1918		松方正義肖像			鹿児島市立美術館蔵
72	第12回文展	1918		肖像某氏の家族			
73	第1回帝展	1919		肖像榎原悦二郎氏子供			
74	第1回帝展	1919		肖像山田昌邦氏夫婦			
75	第2回帝展	1920		江原素六翁肖像			学校法人麻布学園蔵
76	第2回帝展	1920		鯛			島根県立美術館蔵
77	第3回帝展	1921		松平伯爵肖像			
78	第3回帝展	1921		鮎			
79	第4回帝展	1922		肖像			
80	第5回帝展	1924		徳富猪一郎氏肖像			東京国立博物館蔵
81	第5回帝展	1924		田男爵肖像			
82	第6回帝展	1925		渋沢子爵肖像			
83	第6回帝展	1925		スタデー			島根県立美術館蔵
84	第7回帝展	1926		肖像徳川家達公			徳川財団蔵
85	第7回帝展	1926		肖像若槻首相			
86	第8回帝展	1927		肖像岸博士			
87	第8回帝展	1927		某氏の家族			
88	日英博覧会	1910		美人読詩			島根県立美術館蔵
89	日英博覧会	1910		姉妹			

*明らかにタイプミスと思われる日本人名は筆者の判断で訂正して掲載した。
 *フランスのソシエテ・ナショナル・デ・ボザールにも出品記録があるが、フランスの調査は今後の課題としたい。